



千葉大学医学部同窓会報 第170号 題字 故鈴木五郎 (大11卒 元みの は な 同窓会長)

編集発行者  
千葉大学医学部  
みの は な 同窓会報編集部  
〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1  
千葉大学医学部内  
みの は な 同窓会  
電話 (043) 202-3750  
FAX (043) 202-3753  
e-mail : info@inohana.jp  
HP : http://www.inohana.jp/



# 平成27年度 みの は な 同窓会総会開催

平成27年度みの は な 同窓会総会が、平成27年6月13日(土)午後4時より、銀座アスタールお茶の水賓館において開催された。

白澤浩理事の司会により、藤会長の挨拶に続いて、白伊藤晴夫会長から開会の辞が述べられた。会議に先立ち、物故者108名の冥福を祈り黙祷を捧げた。伊藤



白澤理事、幡野雅彦理事から説明があり審議承認された(議事要旨は28面に掲載)。総会に引き続き、平成27年度みの は な 同窓会賞(関連記事は11面に掲載)、みの は な 同窓会特別賞の表彰式と稲葉憲之獨協医科大学長の特講演が行われた(講演内容は2面に掲載)。



懇親会では平成26年秋および27年春の叙勲者を祝った。



本年6月13日開催のみの は な 同窓会総会をもちまして会長を退任致しました。会員諸兄姉のご指導、ご鞭撻に支えられ、4期8年間大過なく務め、済陽高穂新会長に無事タスキを繋ぐことができましたこと、心より御礼申し上げます。千葉大学医学部創立135周年記念事業が一応の完了をみたことは喜ばしいことでした。この事業は築後60数年を経て、老朽化し崩壊の危険がある同窓会館の新営が発端となりました。学生から合宿も出来る同窓会館の再建の要望が強く、

## 総会挨拶 会長退任挨拶をかねて 伊藤 晴 夫 (昭39)

前任の渡辺武名誉会長が短期の実現を提案されました。時あたかも、千葉大学医学部が創立85周年を盛大に祝した記念講堂建設から50年が経過していました。同窓会に加え、後援会ならびに医学研究院長、附属病院長、事務長をはじめとする教職員の皆様方のご協力も得て事業会の発足に至りました。この事業は100年に1度と云われる世界的大不況の時に始まり、大震災の渦中にも拘わらず皆様方より多大なご支援を戴きました。ここに改めて御礼申し上げます。新同窓会館は建築界の権威誌「新建築」においても大きく紹介され、また第21回千葉県建築文化賞を受けるなど、その斬新なデザインが注目されています。同窓会事務室に加え、千葉

医学会、猪之鼻奨学会の事務室も置かれ相互のより緊密な連携も進んでいます。緑の映える大ホールは、医学部のみならず薬学部、看護学部の皆様にも常にご利用頂いております。和風の談話室はサークルなど学生の種々の活動に必須であり、教職員・先輩との交流を通じた人間形成の場としても大いに期待を寄せています。事業のもう一つの柱である135周年記念誌も立派なものが発刊されました。さらに千葉大学医学部理念の言語化やシンボル・マークも素晴らしいものが出来上がりました。記念事業の他にも、みの は な 同窓会報の内容充実を図ると共に、全面的にカラー化し清新な装いとなりました。また、動画も取り込んだオンライン会報の充実も若い会員の同窓会離れを防ぐ一助となるものと思えます。白衣式や留学生交流会の支援、支部支援金の開

**紙面紹介**

総会開催 1  
総会挨拶 2  
特別講演 2  
人事異動 2  
就任挨拶 2  
叙勲感想 8  
同窓会賞受賞 10  
各地のみの は な 会 11  
クラス会 12  
追悼文 18  
研修プログラム 20  
研修医だより 22  
学内情報 23  
課外活動団体だより 24  
会員から 24  
著書紹介 25  
雑文雑談 26  
議事要旨 29  
オンライン会報 31  
編集後記 32

**社会貢献賞**  
松永正訓 (松水クリニック小児科・小児外科、昭62)  
「『運命の子・トリソミー』の出版と障害児の受容をめぐる市民との対話」

**功労賞**  
北川定謙 (財)日本公衆衛生協会名誉会長、昭31  
「多岐にわたる課題解決型の公衆衛生活動の実践」  
―衛生行政の現場から―

**第20回(2015年度) みの は な 同窓会賞 受賞者決定**

(伊藤先生のつづき)  
始、ゐのはな同窓会賞の内容と選考基準の見直しも行われました。

最近の若手会員を中心とした今後の改革に向けた検討も進み、済陽高穂新会長のもと、同窓会がさらなる発展、飛躍を遂げますことを確信しております。

末筆ですが、あらためまして、長年ご指導、ご協力

を賜りました副会長の大井利夫先生、済陽高穂先生、鈴木信夫先生、常任理事、理事、評議員をはじめとする同窓会員の皆様、また常に支えとなっていた事務方の皆様に心より御礼申し上げます。

祝 叙 勲

平成27年 春の叙勲  
 旭日大綬章 唐澤 祥人(昭43)  
 旭日双光章 青木 謹(昭36)  
 嶺井 進(昭38)  
 瑞宝中綬章 三木 亮(昭38)

瑞宝小綬章 鳥羽 剛(昭38)  
 竹森 利忠(昭46)  
 正四位 瑞宝中綬章 宮治 誠(昭38)  
 高齢者叙勲 瑞宝双光章 佐野 伸(昭和医専・昭26)

特別講演

「B型肝炎ウイルス母子感染 対策の推移と更なる工夫」

濁協医科大学長

稲葉 憲之(昭47)



わが国におけるB型肝炎ウイルス(HBV)母子感染予防法として1986年以降厚生省方式が広く実施されてきた。同時期に開発された千葉大方式は見キャリア化阻止率、有害事象発生率において厚生省方式に同等であり、更に通院回数、

それに伴うキャリア母の労力、医療資源と医療費の節減、ドロップアウト率を軽減する方式である。千葉大方式の溢路は当時のHBワクチン(HBV)添付文書に記載されていた「生後2〜3か月に接種」の記載である。これは新生児の免疫応答能や安全性に基づいたものではなく、当時の厚生省方式に沿ったものである。これは、その二年後に出版された米国CDC方式(1988)により雲散

霧消する筈であったが、事実は必ずしもその通りには展開しなかった。その為に予想もしなかった高率な「ドロップアウト」問題が浮上してきたのである。さて、稲葉らが1984年より開発してきた、「千葉大方式」はHBV母子感染の「自然史」と「新生児の免疫応答能」に関する治験に基づいた独自の方式である。その骨子は、妊婦HBsAg(+)であれば出生後24時間内にHBIG筋注とrecombinant HBV (rHBV)を同時投与し、次いで生後1、3か月にワクチン追加接種のみを行う。濁協医大方式は上記方式より生後3か月の追加接種が省かれ、褥婦・出生児の「定期健診」内、即ち分娩・出生後1か月で全てが完了する方式である。両方式とも妊婦

HBsAg(+)であれば児へのHBIG投与は不要である。日本小児科学会より「B型肝炎ワクチンの添付文書改訂についての要望」書が厚生大臣宛に出され(2011年9月21日)、その中で、「国際的に広く採用されている接種スケジュールに変更することを要望した」とある。私たちが今まで主張してきたことが全て記されている。更に、昨年3月23日の「未承認薬検討会議(厚労省 堀田知光座長)にて、ヒトHBIG及びHBVの生後12時間内の使用が認められた。これまでに費やされた時間は長すぎたかなと思うが、関係各位の賛同を得るには必要な時間であったとも思う。先達に敬意を払い、関係各位に感謝しながら発表させて頂く。

人事異動

他大学教授 昭和大 整形外科学 豊根 知明(昭60)  
 東京女子医科大学八千代医療センター 小児科 高梨 潤一(昭63)  
 東京医科大学 分子病理学 真村 瑞子(平4)  
 東邦大学医療センター佐倉病院 内科 熊野 浩太郎(平4)



ゐのはな同窓会賞受賞候補者募集要項

- 第二一回(二〇一六年度)ゐのはな同窓会賞の受賞候補者を左記により募集いたします。
- 一、受賞対象者
    - ① 社会貢献賞 本会員で、医療活動の顕著な業績により、社会に高い貢献をした個人またはグループ。
    - ② 功労賞 医学および広く文化の各領域において、千葉大学および千葉大学ゐのはな同窓会に多大の貢献をした者。
    - 二、表彰
      - ① 社会貢献賞 (三件以内) 盾および賞金(総額三十万円以内)を贈呈します。
      - ② 功労賞 (二件以内) 盾および賞金十万円を贈呈します。
    - 三、応募方法 所定の申請用紙により、二〇一五年十二月一日から二〇一六年一月三十一日までに申請して下さい。
    - 四、受賞者の決定 選考委員、常任理事会の議を経て、会長が行います。審査結果は二〇一六年五月中頃までに各申請者に通知すると共に、ゐのはな同窓会報に掲載します。
    - 五、問い合わせおよび申請用紙請求先 千葉大学医学部内、ゐのはな同窓会事務局 申請用紙は同窓会ホームページよりダウンロードすることが出来ます。

# 就任挨拶

## 千葉県立保健医療大学学長

田邊 政裕 (昭49)



平成27年(2015年)4月1日より山浦晶前学長の後任として千葉県立保健医療大学(保医大)第二代学長を拝命致しました。保医大は平成21年(2009年)に千葉県立衛生短期大学(衛短)と千葉県医療技術大学校(医技大)が整備・統合されて誕生した医療系の4年制大学です。衛短は昭和56年(1981年)に開学した看護学科(第一、第二)、栄養学科、歯科衛生学科からなる短期大学で、千葉県としては初めての県立大学です。初代学長が長井和行先生(昭24)、その後佐藤壹三先生(昭21)、澤田勤也先生(昭28)、野口照義先生(昭32)、山浦晶先生(昭40)と同窓の諸先輩が学長を務められました。昭和62年(1987年)に千葉

県保健婦助産婦専門学院と千葉県衛生専門学院が統合されて千葉県看護大学校が開設され、平成2年(1990年)に理学療法学科、作業療法学科の新設に伴い、千葉県医療技術大学校と名称が変更されました。衛短、医技大からの歴史を辿ると保医大までに30年以上の道のりを歩んできたこととなります。

本学の使命は、「高い倫理観と豊かな人間性、優れた専門的知識と技術を身につけ、国際化にも対応できる人材の育成と保健・医療の政策課題に関する実践的研究により県民の健康づくりに貢献する」ことです。この基本理念のもとに、優秀な看護職、管理栄養士、歯科衛生士、理学療法士、作業療法士、すなわち保健・医療専門職としての「健康づくりのプロフェッショナル(プロ)」を育成します。

我が国は高齢化が急速に進んでいます。団塊の世代が75歳になる10年後の20

25年には、75歳以上の後期高齢者が人口の5分の1を占めるようになると言われています。高齢社会では、複数の慢性疾患を抱える患者を地域や在宅で見守る医療と重症化した難治性の患者を治療する病院での高度先進医療が求められます。

本学の卒業生は、全員が「健康づくりのプロ」としていずれの医療にも対応できる基本的な実践力をしっかりと身に付けて卒業できるように、教職員が一丸となつて教育を行っています。

衛短から保医大へと同窓の先生方が学長を務められてきたことで、千葉大学医学部の伝統である「地域医療への貢献」が保医大にも継承されていることを実感します。これからも千葉県の基本政策である「健康で長生きできる社会づくり」に貢献できる人材の育成に努めます。本学は開学して7年と未だ発展途上にある大学で、取組むべき課題が多々あります。その課題解決に向けて千葉大学医学部、同窓会の諸先生方のご支援、ご指導を今後とも承れば幸いです。

平成27年4月1日付けで着任いたしました。私は、卒後約20年間心臓血管呼吸器外科の臨床に従事しておりましたが、厚生労働省のシンクタンクである国立医療・病院管理研究所(現保健医療科学院)医療政策研究部に、2001年10月に医療安全研究を行う主任研究官ポストが新設され、公募採用されたのを機に本領域を専攻することとなりました。その後、2005年に名古屋大学医学部附属病院医療の質・安全管理部准教授、2009年に東京医科大学医療安全管理学講座主任教授に就任いたしました。

医療安全は世界中でほぼ同時に注目されてきた歴史があり、1999年にInstitute Of Medicine (米国医学院)が「To Err Is Human(人は過つもの)」という報告書を出してから、我

## 千葉大学医学部附属病院

医療安全管理部 教授

相馬 孝博 (新潟大・昭57)



が国でも医療安全に関する制度設計が急ピッチで進められ、私はその裏方として関わって参りました。また医療事故をどのように原因究明して再発防止に繋げるかという課題は連綿として続いており、診療関連死モデル事業にも立ち上げ当初から参画しております。

その一方、善意を持って働いている現場の医療者が萎縮してしまうような事態に陥りかねないことは、臨床医をバックグラウンドとする私にとっても看過できないことであり、こうした政策が単なる締め付けのようにならないようにするのが私の任務であると考えております。ただしメモ書き程度しかない診療録を発見して、暗然とした気持ちにさせられた医療安全管理者は数知れないでしょう。かつて医療とは施せば良いものでした。現代医療では私たちプロフェッショナルは説明責任を果たさなければなりません。医療の結果は昔も今もこれからも不確実なものでありますが、私たちは提供した医療を「自ら

折しも千葉大学は、文部科学省による『スーパーグローバル大学創成支援』に選定され、世界レベルの教育研究とともにグローバル化を牽引する役目を担うことになっておりますので、医療安全分野でも何らかの発信が出来るよう精進したいと考えております。医療安全は一言で言えば組織管理であり、今後の医療者にとって必須のスキルの一つです。本学の人材育成の一環に本領域も加えて頂き、本学出身者が医療界を牽引できるよう努力したいと存じます。新設の部門ではあります。同窓会の皆さまにはご指導とご鞭撻賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

## 千葉大学予防医学センター

運動器疼痛疾患学 教授

佐 粧 孝 久 (平元)



平成27年4月1日をもって千葉大学予防医学センター教授を拝命いたしました。就任に際しまして、

たくさんの先生方からお祝いや激励の言葉を頂きました。この場を拝借いたしました。改めて御礼申し上げます。皆様から頂きましたご厚意には、自身が千葉大学の発展に貢献できるように仕事をしてお応えできるようにしたいと考えている次第です。

私は平成元年に千葉大学医学部を卒業し、守屋秀繁先生が主宰されていた整形外科教室に入局いたしました。同期で入局したのは20名です。1年間、大学院で大勢の同期と賑やかに初期研修時代を過ごしました。私自身は人の中に埋もれていることが居心地よく感じることもあり、多くの同僚と共に過ごせた時間は大変に良い思い出となっております。引き続き2年間の関連病院での研修を経て大学院に入学いたしました。大学院では高次機能制御研究センター・免疫機能分野の谷口先生に師事いたしました。谷口先生からは分子生物学的な研究方法や科学的な物事の見方を学ぶことができました。

多面的に物事を考えることは、その後のあらゆる場面で大きな助けとなっております。谷口先生の教室に4年間在籍させて頂きました。後に学位を取得し、整形外科医として本格的にスタートを切るようになりました。進むべき道として選択しましたのは膝関節外科でしたが、関連病院での1年間の勤務を経て、大学へ戻ることとなりました。守屋教授から直接ご指導頂けるようになったわけです。守屋

先生は当時の日本の膝関節外科を牽引するリーダーであり、非常にアクティブで、高い先生でしたので、大変刺激を受けました。また守屋先生がお持ちの機転力、人を引きつける力には常に驚かされました。結局は守屋先生が退任されるまで10数年、一緒に働かせて頂くこととなりました。守屋先生は今では私にとって父親的存在ともいえる方です。

平成19年に整形外科教室は高橋和久教授が主催する教室となりました。高橋教授からは業績を上げるようにと叱咤激励されました。お尻を叩かれたおかげで、膝関節外科の進歩に寄与で

平成27年4月1日付で筑波大学に赴任し、臨床腫瘍学教室と診療科としての腫瘍内科を立ち上げる任を仰せつかることになりました。



**筑波大学医学医療系  
臨床腫瘍学 教授  
関根 郁夫 (平元)**

誠に身に余る光栄でありますとともに、大変身の引き締まる思いでございます。私は平成元年に千葉大学医学部を卒業し、栗山喬之教授(当時)の主宰する呼吸器内科に入局しました。平成4年には国立がんセンター東病棟の呼吸器科第1期レジデントになり、西脇裕先生(呼吸器内科部長、

当時)から肺癌の画像診断と化学療法を中心に医師として薫陶を受けました。また、佐々木康綱先生(現昭和大学医学部腫瘍内科学教授)率いる化学療法科にインターンシップしたときには、新入院があるたびにDevita

きるような仕事を進めることができるようになりまし。これらの仕事は現在進行形でもあります。私は平成25年から整形外科の准教授を2年間務め、このたび予防医学センターへ異動となりました。予防医学センターは平成28年開講予定の千葉大学大学院医学薬学府先進予防医学共同専攻の核となります。近々、大学院生を募集するホームページが立ち上がりますが、すでに募集定員を超えるほどの勢いがあります。3名の師が私を育ててくださった御恩を肝に銘じ、新たに得た活動の場で恩返しをしていきたいと考えております。

当時)から肺癌の画像診断と化学療法を中心に医師として薫陶を受けました。また、佐々木康綱先生(現昭和大学医学部腫瘍内科学教授)率いる化学療法科にインターンシップしたときには、新入院があるたびにDevita

臨床腫瘍学の教科書を読み耽り、前日に仕入れた知識をあたかも自分の経験のようなふりをして患者さんに説明していました。平成9年に西條長宏先生(現日本臨床腫瘍学会特別顧問)からお誘いを受け、国立がんセンター中央病院呼吸器内科に異動しました。そこでの主要研究テーマは局所進行肺癌に対する化学放射線療法で、今までにIII期非小細胞肺癌患者を対象に交互交代療法、新規抗がん剤の導入、化学放射線療法後の地固め療法、3DCRTを用いた高線量化学放射線療法などの臨床試験を行いました。現在は限局型小細胞肺癌に対する化学放射線療法に引き続きCODE療法とAP療法のランダム化第II相試験(JCOG study 1011)を施行中です。また中央病院在籍中にUniversity of Texas Southwestern Medical Center at Dallas(留学)John D. Minna教授の指導の下、DNAマ

イクロアレイを用いた抗がん剤耐性に関する遺伝子発現の研究を行う機会を得ました。

平成23年から3年間の千葉大学在職中は、臨床腫瘍部滝口裕一教授のご指導の下、頭頸部癌、皮膚癌、婦人科癌、消化器癌、泌尿器癌、乳癌、非ホジキンリンパ腫および原発不明癌などの診断・治療を経験しました。その後千葉県がんセンターで田川雅敏先生(研究所がん治療開発部長、昭54)

ご指導で悪性中皮腫細胞株を用いたベメトレキセド耐性遺伝子について研究を続け、山口武人先生(副院長、昭56)からは病院組織における倫理について教えるを受けました。

筑波大学は、昭和48年に東京教育大学の移転を契機に総合大学として発足しました。医学医療系と附属病院の設立に当たっては多くの先生方があり、今も膠原病・リウマチ・アレルギー内科住田孝之教授(昭54)と整形外科山崎正志教授(昭58)が活躍されています。私は臨床腫瘍学や腫瘍内科の在り方を模索していかなければなりません。また、地域の診療所や病院の先生方との信頼関係も大切

にしたいと存じます。なのはな同窓会の先生方には今後もご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

平成23年から3年間の千葉大学在職中は、臨床腫瘍部滝口裕一教授のご指導の下、頭頸部癌、皮膚癌、婦人科癌、消化器癌、泌尿器癌、乳癌、非ホジキンリンパ腫および原発不明癌などの診断・治療を経験しました。その後千葉県がんセンターで田川雅敏先生(研究所がん治療開発部長、昭54)



**東京医科大学  
免疫学分野 主任教授  
横須賀 忠 (平5)**

私は本学卒業後、当時故山口豊教授が主宰しておられました千葉大学肺癌研究所に整形外科に入局し、9年間、呼吸器外科医としての臨床研鑽を積みましました。大学院入学を機に、旧高次機能研究所遺伝子制御学講座の齊藤隆教授に師事し、平成14年、免疫学教室前教授谷口克先生が設立にご尽力された理化学研究所免疫・アレルギー科学総合研究センターの発足と共に、研究者として免疫学の基礎研究に専

念する機会をいただきました。同センターは国際的にも数少ない免疫学研究の拠点として当時の免疫学を牽引し、私も国内外の一流研究者の方々と協力的に仕事を

する環境に身を置くことができました。そこで免疫細胞の活性化シグナルユニット「マイクロクラスター」を発見するに至り、現在も「T細胞シグナルを可視化する」という独創的かつ先端的な見地から、免疫系の高次機能解明に挑んでおります。免疫学研究を指導して

くださった先生は元より、外科医から突然研究者になるという無謀な申し入れに對しても快く送り出してくださった呼吸器外科前教授藤澤武彦先生、現教授吉野一郎先生、また当時から臓器別研究を前提とした包括的な学問体系をご教示いただいた呼吸器内科教授異浩一郎先生には大変感謝しております。

東京医科大学は来年初創立100周年を迎え、副都心

にある大病院の建て替えなど記念事業に向けた取り組みで活気に湧いております。東京医学専門学校（東京医科大学の前身）の創立には、学校側と対立し、日本医学専門学校（日本医科大学の前身）を同盟退学した学生450人が、理想とする学びの場を自らの手で作り上げた、という劇的な歴史秘話がございます。また、昨今の医学部人気と地の利の良さから入学して来る学生の質も急上昇し、建学の精神「自主自学」の下、学生は自由な雰囲気の中で文武両道の学生生活を謳歌しております。狭い運動場で夜の9時までタイトなスケジュールを廻しながら部活動に励む彼らの掛け声はビルの谷間で反響し、私の学生時代のものはな山を懐古させます。高層ビルの向こうには今だ高きものはな山があることを思い出しながら、純粋な彼ら学生の教育を行うと同時に、生命科学の核心に迫れるようなサイエンスを、また臨床応用に繋がるイノベーションな研究を展開できるよう誠心努力して参りたいと思っております。ご報告させていただきます。この御礼と共に、これからの同窓の諸先生のご指導ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

### 帝京大学医学部附属病院

#### リハビリテーション科 教授

#### 緒方直史（平4）



平成26年7月1日付けにて帝京大学医学部附属病院リハビリテーション（以下リハビリ）科教授に就任致しました。

私は、平成4年（1992年）に千葉大学医学部を卒業致しましたが、学生時代に競技スキーで下腿骨折を受傷した事が縁で整形外科を志すようになり、卒業と同時に東京大学医学部整形外科に入局し、研修を開始しました。その後いくつかの関連病院を回って、整形外科医として研鑽しておりました。脊椎外科に興味があり、東大の脊髄診にも所属しながら脊椎手術に明け暮れていた時、当時、東大では後縦靭帯骨化症の原因遺伝子の解析が始まっており、300人ほどのサンプルを集めたところでその解析をしようということに

月より現在に至っております。

帝京大学リハビリ科は同大整形外科に着任された岩倉博光先生が昭和52年にリハビリ科教授に就任され、独立した診療業務を行うようになったのが始まりです。

昭和57年にリハビリ科が正式に開設され、岩倉教授が初代教授に、平成2年から三上真弘教授、平成20年からは栢森良二教授に引き継がれ、私で4代目になりました。

現在5名のリハビリ医、23名の理学療法士と7名の作業療法士で急性期リハビリに対応すべく日々奮闘しているところです。伝統と歴史のあるリハビリ科でありますので、その名に恥じないよう邁進して参りたいと思っております。

各科での入院患者さんのリハビリの依頼に対応しておりますが、急性期病院でのリハビリ対応である性質上リハビリ科としての病床は持っておりません。主に他科からのリハビリ依頼が概ね週6、70件ほどあり、それを日々適応も含めて振り分けておりますが、最近では、周術期早期にリハビリを行う事で退院を目指すという流れになっており、帝京大学でも多くの科からリハビリ依頼が出るようになって

りました。整形外科・神経内科・脳外科はもちろですが、呼吸器外科、泌尿器科、形成外科などからも積極的に術前からのリハビリ依頼が出るようになり、術前の元気な時、あるいは早い内にリハビリ依頼を出して欲しいと言ってもなかなか周知されていない急性期病院が多い中、帝京大学は周術期でのリハビリの取組みに積極的に就任早々驚いています。

現在、専門医の数で割ると圧倒的に医師が足りないのは、リハビリ医と救急医と言われており、実際どのリハビリ病院に聞いても医師が足りないとの話が絶えませんでした。整形外科・神経内科・脳外科はもちろですが、呼吸器外科、泌尿器科、形成外科などからも積極的に術前からのリハビリ依頼が出るようになり、術前の元気な時、あるいは早い内にリハビリ依頼を出して欲しいと言ってもなかなか周知されていない急性期病院が多い中、帝京大学は周術期でのリハビリの取組みに積極的に就任早々驚いています。

大変微力ではございますが、当科でも転倒予防や骨折予防などに積極的に取り組んでいき、帝京大学リハビリ科の特色を出していきたいと考えておりますので、今後とも同窓会の皆様のご指導、ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

にります。千葉市の東南部に位置し、敷地は約12万㎡（東京ドームの2.6倍）あり閑静な環境です。

全国に143あるNHO病院では、それぞれの病院がその特性に応じた医療を提供しています。千葉東病院は、内科、小児科、外科、泌尿器科、病理診断科、等の連携による透析・移植を含む腎疾患の総合的な治療のほか、内科系では結核を含む呼吸器疾患、糖尿病・内分泌代謝疾患、アレルギー・膠原病・リウマチを、外科系では肝胆膵・消化器外科、整形外科、眼科、形成外科などの診療を行っています。また他の設立主体では対応が困難な神経難病（神経内科）、重症心身障害に対して、セーフティネットの基幹病院としての機能を果たしています。

病床機能としては、急性期50床、回復期98床、慢性期230床（結核25床、重心120床含む）で運用しており、地域医療連携室を中心に（高度）急性期機能病院と連携を深めてまいります。紹介率は60%、逆紹介率は80%です。在宅医療では、重症心身障害児（者）、神経難病等の在宅療養患者の支援のための一時的入院に積極的に取り組んでおり、

### （独法）国立病院機構 千葉東病院 院長

#### 新井 公人（金沢大・昭55）



平成27年4月1日より、山岸文雄先生（現名喜院長）の後任として千葉東病院院長を拝命致しました。当院は千葉県に4つある国立病院機構（NHO）病院の一

つで、427床（収容可能病床378床）を有しています。平成16年3月に国立佐倉病院（明治7年創設の東京鎮台佐倉営所病院が母体）と国立療養所千葉東病院（昭和13年創設の傷痍軍人千葉療養所が母体）が統合し、国立千葉東病院として発足。翌4月に独立行政法人国立病院機構千葉東病院に移行し、今年が12年目

急性増悪時にいつでも対応できる体制を整えています。また難病支援センター、療育指導室を活用して種々の相談に対応しています。

当院の特長の一つに臨床研究部の併設が挙げられます。NHOのスケールメリットを活かした多施設共同研究、各種治験（平成26年度契約額約1・5億円）のほか、マウス、ラット、イヌなどを用いた動物実験、細胞や遺伝子を扱う分子生物学的基礎研究を行っています。NHO病院の中で常にトップクラスの業績を維持し成果を国民に還元しています。

質の高い医療を継続するために、臨床・研究のほかに、医療従事者の育成（教育）が欠かせません。千葉県のNHO4病院では本年度から初期臨床研修プログラムとして4病院連合臨床研修プログラムを立ち上げ、1期生が研修を始めております。その他、当院主催の腎疾患研修会や摂食機能向上研修会は毎年全国各地から多数の参加があります。

経済学者の宇沢弘文先生は、「ヒポクラテスの誓いのもと医療を行ったとき、医学的最適性と経済的最適性の両立は可能か？」という難しい問いを出されています。

す。持続可能な形で医療を提供するためには健全な経営が必要です。医療を取り巻く状況は日々厳しさを増

### 国保国吉病院組合 いすみ医療センター 病院長

伴 俊 明 (旭川医大・昭58)



平成27年4月1日付けでいすみ医療センター病院長を拝命いたしました。あのはな同窓会の諸先生方には感謝申し上げます。

私は昭和58年に旭川医科大学医学部を卒業し、当時の千葉大学医学部第二内科学教室（故吉田尚教授）に入局いたしました。千葉大学附属病院、国立柏野病院での研修後大学の教室に戻り、当時田村泰先生の主宰する内分泌研究室に入り、代謝・内分泌の臨床の研究を積み重ねていただきました。平井愛山先生指導の下、コレステロールの細胞内転送蛋白のprotein 2の動脈硬化におよ

してはいますが、社会的共通資本としての医療を守り、次世代に伝えてまいります。

ぼす役割の研究にて学位を取得いたしました。その後米国国立衛生研究所のKohn先生の研究室へ留学し、甲状腺刺激ホルモン(TSH)受容体の構造に関する研究を行いました。これが縁で、甲状腺の臨床・研究が私の生涯のテーマとなっております。

平成7年よりいすみ医療センターの前身である国保国吉病院へ勤務、平成9年より姫野雄司前院長の下で副院長として働いてまいりました。

いすみ医療センターは昭和24年に国吉町外5ヶ村村国保組合立国吉病院としていすみ市（旧夷隅町）に開設されました。当時は結核をはじめとする感染症の診療が主体であったと聞いております。平成21年に新病院への移転に伴い名称を「いすみ医療センター」と改め、一般病床92床、感染病床4床、療養病床48床の構成と

なっております。時代とともに疾病構造も変化し、現在は高血圧・糖尿病といった生活習慣病の患者さんが多くを占めております。

現在の当院はいすみ市・大多喜町・御宿町の1市2町よりなる組合立の病院です。構成市町は千葉県内でも最も少子高齢化の進んだ地域の一つであり、医療面でもそのニーズに合わせた対応が求められております。

当院の特徴である急性期病棟・療養病棟・介護老健施設として訪問診療を有機的に結ぶ、地域包括型の医療の実践がますます重要となります。しかし医師不足の深刻な外房地区にあって当院も例外ではありません。

慢性的な常勤医師不足・看護師不足が続いておりますが、近年その傾向は特に顕著となっております。以前からご支援いただいている千葉大学医学部・東邦大学医療センター佐倉病院・日本医科大学に加え、最近では近隣の千葉県循環器病センター・亀田総合病院・塩田病院から専門医師の派遣支援を受け、日常の診療を維持しております。今後も医師・看護師の確保が最重要課題であることは間違いなく、どのような対策で地域医療を守るかを模索していると

ころです。もとより微力ではありますがありますが、地域医療を守るべく誠心誠意努力してまいりたいと思います。

このような中で、あのはな同窓会の諸先生方からは以前より温かいお言葉、ご

### 千葉市立 青葉病院 院長



平成27年4月1日付けを持ちまして、千葉市立青葉病院長に就任いたしました。これまでお世話になりました。あのはな同窓会の皆様には誠にありがとうございました。

私は、昭和57年に千葉大学医学部を卒業し、第2内科（現在の細胞治療内科学）に入局後、千葉大学病院、君津中央病院で研修を積み、内分泌研究室に入りました。吉田尚教授、田村泰先生、平井愛山先生のご指導のもと学位を取得し、平成元年から4年まで米国ノースカロライナ大学に留学し、細胞増殖とp3Kについて研究を行いました。帰国後、1

協力をいただいております。この場をお借りしてお礼を申し上げますとともに、今後とも引き続きご指導、ご支援をいただきますようお願い申し上げます。

### 山本 恭 平 (昭57)

年間国吉病院（現いすみ医療センター）に勤務し、大学にて内分泌学の臨床及び研究を続けました。その後平成7年より君津中央病院内分泌代謝科に勤務、さらに平成14年に旧千葉市立病院に異動し、平成15年に青葉病院への移転、開院に伴い、青葉病院に移りました。

青葉病院では平成18年より内科部長として内科全体のマネージメントを行い、また臨床研修委員長として初期研修医、後期研修医の教育に尽力しました。

青葉病院は、千葉市の地域中核病院であり、年間救急車受入台数が約4000台と市民の救急医療を担う病院です。今年10月には新救急棟も完成予定であり、さらに充実した医療を提供できるものと思っております。その他、県内有数の骨

髄移植数を誇る血液内科、身体疾患を持つ精神科患者の受入を行う精神科、また県内でも教少ない児童精神科病床などを有しており、これらの特色を生かして千葉市民の皆様へ貢献したいと思っております。

現在、第3期千葉市立病院改革プランを実行中であり、齋藤康病院事業管理者のもと「市民が必要とする安全、安心な医療を一人でも多くの市民に提供する」ために職員一丸となって頑張っております。

あのはな同窓会の皆様においては今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

### 千葉大学校友会総会のお知らせ

日時：平成27年11月21日（土）  
14時20分から（予定）  
場所：千葉大学けやき会館大ホール  
（千葉大学西千葉キャンパス）

### 近況報告 東京大学医科学研究所 先端医療研究センター 先端医療開発推進分野 教授

長 村 文 孝 (平元)



同窓の先生方、本来ならば就任の挨拶として報告させていただくべきところ、私の怠惰にて時間が経過しましたゆえ、近況報告となりましたことをまずはお詫び申し上げます。

私が勤務いたします東京大学医科学研究所(医科研)は、北里柴三郎により伝染病研究所として設立され、本郷、駒場、柏キャンパスとは別に港区白金台に位置しています。がん、感染症等の難治性疾患を対象とした最先端の研究と医療を進めることを目的として附属病院を有する我が国最大規模の生命科学研究所としての位置づけとなっております。医科研には旧第一内科血液グループの先生方を始め、多くの先生が勤務されたことがあり昔から深い関係があります。医科研の研究

は講座制ではなく、その時々テーマに合わせて研究者を招聘し、研究者の退官等によりその研究室は閉鎖となるプロジェクト型の運用を行っています。近年、医薬品・医療機器等の開発対象候補(シーズ)を大学等のアカデミアに求めるようになっており、国は基礎研究から承認あるいは医療技術としての定着までの全過程を通じて支援を行う拠点形成を進めています。医科研はトランスレーショナルリサーチ推進の拠点として、シーズの発掘と開発支援を積極的に進めております。シーズ開発支援には各種法規・規制と実際の現場との調和を進めるレギュラトリーサイエンスが必要となります。これを推進しシーズ開発を促進することを目的に先端医療開発推進分野が設置され、平成23年12月に教授を拝命いたしました。また、治験とトランスレーショナルリサーチ実施支援と管理を目的とするTR・治験センター長を兼務

しております。私は平成元年に千葉大学医学部を卒業後、第一内科(当時、大藤正雄教授)に入局し、内科ローテート研修、栃木県厚生連石橋総合病院勤務を経て第一内科血液グループで血液疾患診療に携わりました。平成6年から医科研の病態薬理研究部(当時、浅野茂隆教授)で血液診療とレチノイドと白血球細胞のレセプターの機能及び分化に関する基礎研究を行い、平成8年からは千葉大学保健管理センター(当時、長尾啓一教授)助手として勤務いたしました。この間、臨床研究への興味から東京大学生物統計学教室(当時、大橋靖雄教授)に出入りしていましたが、平成10年より米国食品医薬品局(FDA)に留学いたしました。FDAでは抗がん剤部で医系審査官として治験や承認の審査業務を担当するとともに、抗がん剤第一相試験デザイン検討と抗がん剤承認根拠解析のプロジェクトに参加し、審査資料等を取り纏める機会に恵まれました。2年半の留学の後、医科研に戻り、帰国後間もなく先端医療開発を安全に進めるために設立された医療安全管理部の所属となりました。名称通り

「医療安全」にも携わることになり、平成26年にTR・治験センターと医療安全管理部に分離されるまで医療安全管理も担当しております。現在支援を行っているシーズには、再生医療、腫瘍溶解ウイルス療法、遺伝子治療、核酸医薬等新規のものも多く、参考とするべき資料が乏しい状況で苦勞が耐えられません。また、知的財

産権、非臨床試験、医薬品等製造、研究倫理、利益相反管理、個人情報保護等関連する項目は年々増加する一方です。千葉大学医学部附属病院は臨床研究中核病院に指定されており、医科研同様シーズ開発に力をいれておられます。臨床試験部長の花岡教授は彼が研修医としてローテートしてきた時に私がオーベンであった関係もあり、千葉大学に

来る機会を与えてくださっており、今後益々の協力関係を築いていければと思っております。最後になりますが、今回の報告につきましての同窓会事務局にご連絡の労をとっていただきました加藤直也先生(昭和61年卒)旧第一内科先輩、現医科研先端ゲノム医学分野)に深謝いたします。

### 災害医療フォーラムin福島 病院からの全患者避難：経験から学ぶ

日 時：平成27年11月29日(日) 13:30~16:30  
場 所：ザ・セレクトン福島西館3階「安達太良」  
講 師：(予定、演題名未定)

- 福島県立医科大学 横山斉先生 東日本大震災での福島の経験
- 陸前高田病院 石木幹人先生 東日本大震災での病院被災経験
- 高橋病院 高橋玲比古先生 阪神淡路大震災の火災からの病院避難経験
- 小千谷病院元看護部長 佐藤和美先生 中越大震災での病院被災経験
- 新潟大学 田村圭子先生ハリケーンサンディでのニューヨーク市の避難
- 司会 弘前大学 福田幾夫先生

総合討論・司会 兵庫県災害医療センター顧問 鶴飼卓先生

参 加 費：無料  
対 象：医療関係者  
申 込 方 法：WEBにて事前申し込みをお願いします。

[http://www.setsunan-t.com/sip\\_project/sys/forum\\_fukushima/](http://www.setsunan-t.com/sip_project/sys/forum_fukushima/)

問い合わせ先  
〒036-8562 青森県弘前市在府町5  
弘前大学大学院医学研究科胸部心臓血管外科  
福田幾夫 Tel 0172-39-5074 Fax 0172-37-8340  
E-mail: gekal@hirosaki-u.ac.jp



Working together for a healthier world™  
より健康な世界の実現のために

様々な病気に打ち勝つため、ファイザーは世界中で新薬の研究開発に取り組んでいます。画期的な新薬の創出に加え、特許が切れた後も大切に長く使われているエスタブリッシュ医薬品を医療の現場にお届けしています。

ファイザー株式会社 www.pfizer.co.jp

# るのほな同窓会各地区会長挨拶

## 信州るのほな会長を引き受けて

信州るのほな会  
新会長 宮坂 斉 (昭42)



「長野縣猪鼻会」と称されていた昭和60年ごろ、松本で元会長である百瀬孝男先生(昭6)にお会いした時のことを思い出しました。当時の長野縣猪鼻会は毎年開催されており、活発に活動されていたことを窺い知ることができました。また百瀬先生は友人はだしの「手品師」でもありました。その後、昭和63年に熊谷信夫先生(昭28)が会長に就任され、平成24年までの長きにわたり会の維持・発展に尽力され、平成12年に会の名称は「信州るのほな会」に改称されました。その後、平成24年内藤威先生(昭48)が会長に就任されましたが体調を崩され、今年3月私りが会長職を引き継ぐことになりました。

私は昭和42年卒で、1年間のインターンの後、整形外科に入局しました。当時の整形外科は今ほどに専門分化してはおりませんでした。したが、脊椎外科を専攻し、井上駿一教授(昭32)のもとで14年間研鑽に励みました。そして、昭和57年長野県立須坂病院に就職しました。大学での診療と異なり、脊椎も関節も手の外科も外傷も全て一人でこなさなければならぬのでストレスが大きかったのですが、手の外傷、特に切断指の再接着では、小さな2〜3歳の子どもへの切断指(収穫したアスパラを切りそろえる器械で指先を切断)再接合に成功した時は、大学時代にマイクロサージャリーを身につけていた自分に感謝しました。

こうして、自ら選んで就職した須坂病院で定年まで働くつもりでしたが、平成15年、県の指令で県立木曽病院に転勤することになりました。それまで木曽地域は電車で通過することはあっても、立ち寄ったことも、住んだこともなく、知人も友人もいない全く初めての地でした。院長として赴任したこともあって、地域の病院に挨拶周りをしたのですが、その時、木曽地域で一人、松本地域で一人、同窓の先輩の先生にお会いすることができました。それまでお付き合いしていたこともない方々でしたが、お会いした時は素直にほのかなぬくもりがこみ上げてきましたし、長い間留守にしていた実家に帰ってきて両親に会った時のような安堵感が漂い、安心して会話することができました。これが、学生時代から社会人に至るまで、るのほなの台地で知らず知らずに紡がれてきた、目には見えない大切な絆なのだろうかと思ひ至りました。

先輩の先生方が築きあげてきた「信州るのほな会」も世の流れと同様高齢化の波が及んでおりますが、会誌の発刊など情報交換を通じてお互いの意思疎通を図り親睦を深めることで、何時までも若々しさを維持し絆を守っていきたいと思っています。

## 北陸るのほな同窓会の会長を引き継ぎました

北陸るのほな同窓会  
新会長 浜崎 智仁 (昭46)



先日、北陸るのほな同窓会の会長役を辻陽雄先生より仰せつかり、少々慌てています。それまでは、故片山喬先生のと辻先生が引き継がれており、小生のような小物が出る番ではないのですが、順番とか、住所とかでそのようになったのだと理解しています。



北陸るのほな同窓会と布施秀樹教授の退官記念の会(3月20日)

小生が富山医科薬科大学へ来たのは83年で、今は聖隷佐倉市民病院と変わりましたが、当時の国立佐倉病院から移ってきました。富山で驚いたのは、地方都市とはいえ、かなりの規模のるのほな同窓会があることでした。何と、小生の同級生が二名もおり(今田屋章先生、館崎慎一郎先生)、非常に心強く思いました。また、元第二内科教授の熊谷朗先生が副学長・病院長を務められており、いろいろ

助けて頂きました。赴任後最初の数年は同窓会を開くと、以前より富山にいらつしやつたすばらしい先生方を含め30人以上の宴会となり、富山の温泉宿や宴会場で開催するのですが、それは賑やかなものでした。当時の会員には富山医科薬科大学(2005年より富山大学)創生期の個性豊かな強者が何人もいらつしやり、非常に活気がありました。さらに、大学を創設する際の幹事校4大学写真右から  
陽雄(昭44)、辻  
陽雄(昭33)、  
布施秀樹(昭  
51)、浜崎智仁  
(昭46)、小宮  
顕(平4)  
後列・山田均  
(昭48)、田村  
須賀子(千葉  
大看)、長谷川  
ともみ(千葉  
大看)、稲葉英  
夫(昭54)、加  
藤智規(平  
13)

願いをこめた新薬を、  
世界のあなたに届けたい。



受章の挨拶

旭日大綬章

旭日大綬章を受章して

唐澤祥人(昭43)



平成27年4月29日、旭日大綬章を受章の栄に浴しました。5月8日、宮内省に参内し、宮内省の親授式において、天皇陛下、御自ら旭日大綬章を賜り、安倍内閣総理大臣より勲記を拝受しました。次いで大綬章を佩用し、天皇陛下に拝謁いたしました。この栄誉は、今日の医療界において臨床、教育、研究、医政などに日夜心血を注がれる全ての方々の御顕彰であることを肝に銘じております。

唐澤祥人(昭43)

年に司法保護司を拝命し更生保護事業に参加しました。昭和49年春、地元で墨田区医師会の理事に招聘され、感染症対策、大規模事故・災害対策、環境問題、公衆衛生事業などに取り組みました。平成4年に墨田区医師会会長を拝命しました。区防炎会議、保健所運営協議会等に参画しました。東京都医師会の地域医療推進委員会に就任しました。平成7年、社団法人東京医師会の理事に就任し、東京都と医療行政の推進に取り組みました。政策提言を行い、具現化を目指す都医師会事業の重要性を痛感しました。平成5年日本医師会生涯教育委員会、産業保健委員会、社会保険研究委員会、日医年金委員会などに参画しました。平成15年4月に東京都医師会会長を拝命し、都医療審議会、社会福祉審議会、東京マラソン組織委員会などに参画しました。またAEDの設置推進と重大事故や自然災害に対応する東京D

MATはJMATとともに各地で目を見張る活躍を重ねています。今後も医師会は医学医療の専門団体として政策提言、実現していくことが最も重要な責務と考えました。

平成18年4月に日本医師会会長に就任しました。当時は全国的に高難度の医療を担う医師が意欲を失い、地域の医療が後退し、医療崩壊、医療危機などと言われ、社会問題化しました。また

旭日双光章

旭日双光章を受章して

青木 謹(昭36)



このたびの春の叙勲で、旭日双光章を拝受致しました。千葉大学を昭和36年に卒業、国府台病院でのインターンを経て、昭和37年4月千葉大学産科婦人科教室(御園生雄三教授)に入局し、高見澤裕吉先生(当時講師)のご指導を戴きました。千葉県立佐原病院を最後に、昭和44年安房郡丸山町(現南房総市)に帰り、

すでに医療財源も逼迫する事態となっていました。このような事態の打開に取り組み、国の社会保障国民会議、医道審議会、他の審議会、委員会に参画しました。以上が今日までのあらましですが、ここに改めて、掉尾となりますが長年ご支援、ご指導頂いた各位に、深く感謝申し上げます。千葉大学医学部関係各位、おはな同窓会の皆様の限りない盛栄を祈念致します。

師会病院の移転新築、救急告示病院として発足のため、国・県並びに地域からの多大な補助金獲得に奔走。又、おはな同窓会会員である私の要請に応じ、当時の大藤正雄教授、稲垣義明教授、奥井勝二教授の全面的な御援助により、内科・外科の常勤医の倍増。学生時代からの友人である守屋秀繁教授、伊藤晴夫教授の強力な御支援による、整形外科・泌尿器科の新設で、常勤医20名態勢で発足出来、内外から高い評価を戴きました。関係した皆様にお心より感謝申し上げます(残念ながら)

旭日双光章

叙勲によせて

嶺井 進(昭38)



平成27年春の叙勲に旭日双光章を受章させて頂きました。これまで育て下さった千葉大学医学部はじめ、お世話になった方々に心から感謝申し上げます。今回の受章は全く思いがけないことで、これまで私

私が退任してから、様々な軋轢から同病院は安房地域医療センターとなりましたが、救急医療は堅持。併せて、千葉県医師会代議員会議長として平成14年から8年間在位したことも評価され、今回の受章に至ったと思われ。今後は、今回の受章の対象にもなった学校保健の分野で、県医師会及び安房医師会学校保健委員として、子供たちの健康教育とその実践に尽力したいと考えておりますので、今後も宜しくご指導ご鞭撻お願い申し上げます。

昭和32年の本土渡航時、昭和46年の帰沖時はパスポートを要しましたが、翌年昭和47年5月に日本復帰となりパスポートは不要で円経済となりました。当時沖繩県に脳神経外科はなく、昭和46年11月に救急患者が最も多い県立中部病院に脳神経外科を開設し、診療を開始しました。インターン、レジデントは院内に住込んで夜間の急患に対応してくれました。当時はまだCT、MRIは普及しておらず、診断に自信が持てず不安感を抱きながら続けた5年間の診療は不自由でした。その後、自分の目指す診療を行うため念願のCT、MRIを導入し浦添市で開業しました。しかし、その頃から現在も悩まされていることが人材不足です。医師、看護師、薬剤師、放射線技師、理学療法士、介護士等ほとんど全ての分野で人材不足で、医療人材の養成について行政の見直しは充分ではないように思います。現在、高齢社会を迎え、私は救急医療から高齢者の医療よりハビリに仕事をシフトし、年金が今後厳しくなりつつあるので経済の事も勉強し、将来に備えております。そして、これから

は微力ながら今までお世話  
になった方々に恩返しした  
したい所存です。

### 瑞宝小綬章を受章して

鳥羽 剛 (昭38)



この度、私は千葉県病院  
局のご推挙を受け、本年春  
の叙勲で瑞宝小綬章を賜り  
ました。5月12日、厚労省  
において勲記・勲章の伝達  
を受けたのち皇居豊明殿に  
おいて天皇陛下のご拝謁を  
賜りました。受章の最大の  
事由は、平成11〜16年の5  
年間、私が千葉県こども病  
院長を大過なく勤め終えた  
事であると思えます。これ  
は偏に、当時の千葉県こど  
も病院の医療職・事務職ほ  
か全職員の地道な努力に支  
えられて得た充実の5年間  
の賜物です。

申すまでもなくこども病  
院は、小児専門の総合病院  
として特殊で高度な小児医  
療を提供する事が最大の使  
命であります。その目的の  
ため千葉大学小児科学教室  
は勿論、こどもの外科系諸

が、昭和52年、久保教授の  
定年に伴い、先生と共に当  
時計画の進む千葉市立海浜  
病院(昭和58年開院、村上  
和院長、昭32)の小児科設  
立のため大学を辞し千葉市  
に移りました。海浜病院で  
は、その建設理念である病  
診連携、オープンシステム、  
公開カンファレンス(現在  
まで230回)の基礎づく  
りに邁進しました。

た。これらを考えるとき、  
昭和63年に開院して11〜15  
年目の、ひとで言うと思春  
期の前半にあたる成熟過程  
の良い時期に院長職にあつ  
た事は、私にとりまして幸  
いでした。

私は、昭和38年に千葉大  
学を卒業し、インターンを  
終えて翌39年、久保政次教  
授(昭13)の小児科学教室  
(大学院)に進みました。教  
室では、吉田亮講師(元千  
葉大学学長、昭23)のアレ  
ルギー研究班に所属し、2  
年後に千葉市で行われた久  
保教授会頭の東日本小児科  
学会にて吉田先生のなざる  
特別講演のお仕事の一部を  
担う事になり、その時に与  
えられたテーマ「小児のI  
gG代謝」が私の学位論文  
になりました。小児科学教  
室では13年間過ごしました

た。そして平成16年3月の  
定年まで、病院機能の拡充  
(全国の小児専門総合17病院  
で初めて機能評価に合格)、  
日本小児科学会理事(広報  
担当、総務担当理事など各  
2年)等々、個人的にも充  
実した11年を送り、この度  
の叙勲の榮に浴する事がで  
きました。

これこそ皆様のご指導・  
ご支援の賜物と心より感謝  
申し上げる次第です。

現在、千葉市稲毛区の  
翠明会山王病院(谷嶋つね  
院長、昭35)にて小児科部  
長として外来診療に従事し、  
病児との関わりを大切に  
日々過ごしております。

瑞宝小綬章  
叙勲を受けて

現在幸いにも理化学研究  
所で研究室を持ち、若い人  
たちと研究を行っています。  
国立感染症研究所(感染研)  
から叙勲推薦のお話があつ  
た時には、自分の年に驚愕



竹森利忠 (昭46)

し、躊躇しましたが、一生  
に一度とありがたくお受け  
いたしました。

私は卒業後、研修医とし  
て白血病治療に携わり、病  
気の本態を知ろうと基礎に  
進みました。しかし黎明期  
の免疫学に惹かれ多田富雄  
先生の大学院生となり卒業、  
Klaus Rajewsky教授が率  
いる西ドイツケルン大学附  
属遺伝学研究所で研究員の

職を得て6年半過ぎしまし  
た。研究室は優れた同僚と  
自由にあふれ、芸術的環境  
は身近にあり忘れがたい時  
代でしたが、谷口克先生よ  
り自由な研究をして良いと  
のOpaをいただき希望に燃  
えて帰国。Bリンパ球分化  
の責任遺伝子の同定を目指  
し、低温度で幼若B細胞を  
ガン化増殖させるが高温度  
で脱腫瘍化、再分化を許容  
する温度感受性Abelson  
Murine Leukemia virus変  
異株を初めて獲得し、研究  
開始の弾みとなりました。

感染研(当時国立予防衛  
生研究所)へはレトロウイ  
ルス研究手技をご教授いた  
だいた吉倉廣先生のお勧め

で応募、免疫部長として長  
年在籍しました。入所後、  
新興再興感染症の勃発と時  
代の要請から、研究所はC  
DCを念頭に置いた運営に  
転換し、研究部の舵取りと  
成果の積み重ねに苦勞し、  
自身の研究もBリンパ球分  
化からワクチンの基礎であ  
る免疫記憶の研究にシフト  
しました。他所へのお誘い  
が何度かありましたが、社  
会に必要とされる感染研の  
業務はやりがいがありまし  
た。

定年退官後、理化学研究  
所免疫アレルギーセンター  
(谷口克センター長)で免疫  
記憶研究室のグループディ  
レクターとして7年間研究

を続ける幸運に恵まれ、2  
013年より改組後の統合  
生命医学研究センター  
(小安重夫センター長)でコ  
ーディネーターとともに創  
薬抗体基盤ユニットのリー  
ダーとして、急性骨髄性白  
血病の治療を目的とした抗  
体医薬の開発研究を行って  
います。多くの若い方が白  
血病で亡くなられ無念の思  
いをしてから何十年後、原  
点に戻りました。

新しい同窓会館  
寄附者ご芳名  
昭39  
坪井 秀一

2015年 第40回  
**みのはな美術展**  
 —千葉大学医学部OBによる美術展—  
**10月5日(月)~10月11日(日)**  
 AM11:00~PM6:00 最終日4時

初秋の候、益々御清栄のこととお慶び申し上げます。  
例年通り下記の会場で、第40回展を開催いたします。  
ご多用中恐縮ながら何卒ご高覧賜りたくご案内申し  
上げます。

銀座 びまわり  
**ギャラリー向日葵**  
 〒104-0061  
 東京都中央区銀座5-9-13  
 銀座菊正ビル2F  
 TEL 会場 03-3572-0830  
 TEL 事務所 03-3573-1680

# あのはな同窓会賞 受賞によせて

## 功 勞 賞

財日本公衆衛生協会

名誉会長 北 川 定 謙 (昭31)



このたびは、あのはな同窓会賞功勞賞をいただく光栄に浴し、同窓の皆様、特に選考に当られたご関係の皆様のご厚意に心から感謝申し上げます。

表彰の銘は「多岐にわたる課題解決型の公衆衛生活動の実践―衛生行政の現場から―」ということでした。

私にとってはまったく思ひもかけない名譽なことでした。ただただありがとうございます。ありがとうございました一言につきま

す。今回の受賞は公衆衛生特に衛生行政の分野での仕事に光をあてていただいたことで、私のみならず、この分野で仕事をしている同僚諸君にとっても大変好ましいことであると思うものです。

医学部を卒業すると臨床

の道を選ぶ、あるいは研究

に関心を持ち、また実力が

ある人は研究の道を選ぶと

いうことが一般である中で、

私は学生時代に社会医学研

究会に在籍したことなどか

ら、卒業時に柳澤利喜雄教

授のお奨めがあつて、衛生

行政の道を選ぶことになり

ました。衛生行政は一言で

云えば、広い意味での保健

医療全般にかかる行政の分

野です。中央で云えば現厚

生労働省がその中心で、今

日では約40以上の大学から

200人を超える医師であ

る行政官がその分野で課題

を発掘し、政治にアピール

し財政当局を説得し事業の

具体化をはかるというよう

な仕事をしております。

昭和20年、敗戦により連

合国軍の占領下で厚生省の

技術行政が大きく飛躍しま

した。

G HQの関係部局のトッ

プはサマス大佐(医師、後

に准将)で、日本の衛生分

野における技術行政の改革

に大きな力を発揮しました。日本側のカウンターパートは勝俣稔(日本公衆衛生の父)として位置づけられた)を中心とする技官集団でした。日本の衛生行政の専門性が低いことを指摘して、大改革を進め、衛生3局のトップに医師を据えるようにしたのです。

例えば結核にしても、そ

の他の感染症にしても、筋

ジストロフィーやALSな

どの難治性疾患対策にして

も、さらには、がんや循環

器疾患などの生活習慣病や

精神神経疾患にしても、す

べて組織の大規模な研究と

その成果を社会に適用して

いくうえで、行政の力は不

可欠です。大学や医師会な

どの専門機能との連携は当

然のことです。

2004年ころ、本学の

学生諸君の取材を受ける機

会がありました。学生諸君

が、各研究室などを回って

取材した結果を「Inoh

ana2004-2005」

という冊子にまとめておら

れます。その時の取材者のお

一人、松本晴樹君(平18)

は現在、厚生労働省医政局

で頑張っておられます。

全国の大学の中でも千葉

はまだこれからという環境

にあります。大学全体とし

て、また個々の医療人とし

て、衛生行政に目を向けていただけるとありがたいと思います。私が在職中に担当し、印象に残っている仕事である「対がん10力年総合戦略」の背景、内容については、柳田邦男著「ガン回廊の炎(講談社・1992年第12刷)」

## 社 会 貢 献 賞

松永クリニック小児科・小児外科

院長 松 永 正 訓 (昭62)



### 【はじめに】

千葉大学医学部を卒業後、小児外科教室に入局し、19年間にわたって約1800人の子どもに外科治療をおこないました。また203人の小児がんの家族と共に闘病し多くのことを学びました。40歳の時に大病を患い退職を余儀なくされ、2006年に開業医となりました。「運命の子・トリソミー」という作品で第20回小学館ノンフィクション大賞を頂き、この本をきっかけに大小さまざまな市民の

に詳述されています。また、柳田邦男著「ガン回廊の朝(講談社・1979年第9刷)」には、市川平三郎先生(昭23)チームによる「X線二重造影法の研究」について詳述されています。ご関心のある方は両方共々お読みください。

### 【1988年の腹壁破裂】

研修医の時に、腹壁破裂の新生児の治療に加わりました。根治手術の終了後、家族はその赤ちゃんを受容しようとしませんでした。奇形の子は育てられないというの理由でした。私にとって、生命倫理について考えるきっかけとなります。

### 【1993年の食道閉鎖】

新生児科からの要請で、食道閉鎖の赤ちゃんに食道・食道吻合をおこないました。後日、染色体検査で18トリソミーと診断され、短命であるという理由で治療は一切しないという方針になりました。その赤ちゃんは術後一カ月で亡くなり、

深い疑問を抱きました。【2011年の13トリソミー】開業医になつていた私に総合病院から連絡が来ます。多発奇形を伴う13トリソミーの乳児が在宅に移行するので、地元の主治医になつて欲しいという依頼でした。両親は愛情深く我が子に接していましたが、重度障害児を授かったことの意味をはかりかねていました。私は自宅への訪問をくり返し、さらに、その他のいくつかの障害児の家庭も訪問して、障害児を受容することの意味を突き詰めていきました。

### 【2013年の運命の子】

その乳児は予期に反して成長を見せるようになり、やがて2歳になります。母親は、「この子は幸せの意味を教えるために生まれて来てくれた」と誇らしげに語ってくれました。短命の定めにある子を授かった意味を、母親なりに理解できた瞬間に私は立ち会うことになったのです。その子が生きた記録を本として上梓しました。

### 【2014年の市民との交流】

5つの勉強会や市民公開講座に呼ばれて講演をさせて頂きました。これらの講演会は、市民の皆様から多

数のご意見を伺うという対話型になりました。宮崎市の自立障害者が主催の講演会では、会の前日から障害当事者の方々と長時間にわたつて意見交換ができました。東京・練馬での講演は、生命の尊厳と倫理を考える市民グループの立ち上げにつながりました。

### 【現在】

障害胎児の生命の選別が加速しています。その倫理性を論じるためには、障害児の受容について考える必要があります。受容の道とはいかなるものかを理解し、命の多様性をどう尊重していくかは、医療従事者に限らず、誰にとっても極めて大切なことです。

### 【未来】

夢があります。それは、ふたたび教官となつてどこかの大学の教壇に立つことです。一般教養を学ぶ若い学生を相手に「命と倫理の授業」を試みたいという気持ちがあり、そうした日が来ることを願っています。



# 各地ののな会 だより

## 松戸ののな会

平成26年度松戸ののな会は、平成27年3月14日(土) 聖徳大学10号館12階レネ(懇親会は13階レストラン・スパカ)にて開催されました。千葉県大学



院医学研究院小児病態学教授の下条直樹先生をお招きし、「アレルギー疾患についての最近の話題 ―食物アレルギーを中心に―」と題する講演をして頂きました。座長を林こどもクリニック院長の林龍哉先生にお願いしました。

アレルギーに関する最近の知見について理解しやすく解説をしていただき、会員からは次のような感想がありました。経皮感作による食物アレルギーのあることを知り、乳児の湿疹のケアについてより前向きに取り組もうと思つた。アレルギーの背景因子として腸内細菌叢の関与が大きいと考えられていることを聞き、きちんとした排便習慣をつけることがア

レルギー防止の観点からもより大切であると感した。スギ花粉によるアレルギー性鼻炎の舌下免疫療法の治療が進行中とのこと、おおいに期待したい。

下条直樹教授は本学部卒業翌年の昭和55年4月より1年間、松戸市立病院小児科で研修されました。当時はストリート研修のため小児科の病棟と外来にいらつしやる時間が大半であつたと思われませんが、先生の気さくなお人柄のためか院内の多くのスタッフにそのお名前が知られていました。

先生の学生時代を知る硬式庭球部の仲間からは意外な裏話も披露され、楽しく和やかな懇親会になりました。

千葉県下唯一の小児センターを擁する松戸市立病院と本学部とが一層の連携をとり、小児医療だけでなく成人医療・救急医療・周産期医療などが、より充実することを期待したいと思つています。

大・昭61)、堂垂伸治(昭60)、山口卓秀(昭57)、岩井直路(昭57)、木村亮(昭57)、宮本茂樹(昭51)、小森功夫(昭57)、渡辺寛(昭41)、鈴木一広(平4)、藤塚光慶(昭43)、上瀧邦雄(山梨医大・昭61)、石島秀紀(昭60)、島田薫(昭57)、田代淳(昭60)、青木俊郎(昭63)

が多かつた。また大学病院の未来では、世界最高水準の大学病院を目指している熱意が伝わってきた。それとともに付け加えて頂いた地域医療体制の再編構想に対して、当地域としての要望、意見が出された。懇親会は、研修医や若い医師にもたくさん参加して頂き、君津中央病院名誉院長の唐木清一先生(昭28)の乾杯で和やかに行われた。最後は木更津の街に繰り出し夜更けまで飲み明かし交歓の場を持った。

## 君津木更津ののな同窓会

平成27年5月26日木更津市の東京ベイプラザホテルで地区同窓会の年次総会が開催された。当地区は103名の会員を数えるが、今回は47名の出席をみた。ま

写真右から  
前列：小野元子(昭51)、林龍哉(昭42)、小林伸行(昭41)、植村研一(昭34)、下条直樹教授(昭54)、塩川喜之(昭34)、武井孝達(昭41)、小野和則(昭51)  
後列：藤村尚代(山梨医大・平8)、澁谷潔(富山医業



写真右から  
前列：土屋俊一(金沢大・昭51)、田中正(昭49)、青柳博(昭49)、福山悦男(昭36)、三枝一雄(昭32)、山本修一教授(昭58)、松清央(昭43)、唐木清一(昭28)、田中弘一(昭42)、片海七郎(東邦大・昭40)、田中寿一(昭43)  
2列目：木村博昭(滋賀医大・昭58)、三枝奈芳紀(信州大・昭57)、永寫薫(昭56)、岡陽一(昭56)、竹内修(東海大・昭61)、鮎澤溶一(北里大・平元)、山本健介(昭44)、山内大輔、秋葉龍太郎  
3列目：河木潤(高根医大・平3)、海保隆(昭57)、若山美紀(順天大・平11)、北村伸哉(平元)、加藤大介

(昭62)、山口敏広(北里大・昭54)、平田貴(昭59)、須藤義夫(昭55)、畦元亮作(昭58)、李元浩(昭53)  
4列目：孫莉玲(平3)、浅海紀子(平7)、山田慎一(平7)、清水弘則(平4)、古谷雄三(昭61)、山田博之(平9)、渡部良夫(昭63)、永寫(学部生)  
最後列：飯島雄太(平27)、柴田裕輔(平27)、諏訪部信一(平3)、柳澤真司(昭60)、戸ヶ崎賢太郎(平27)(岡陽一)

# ク ラ ス 会

## 爾久会 (昭29)

年1回開催している同級会は、快晴の平成27年6月21日、飯田橋のホテルメトロポリタンエドモンドにおいて開催しました。14名の

出席(ご夫人2名を含む)となり、各人が懐古談や現況の報告などで2時間半の楽しいひとときをおくりました。

来られなかった18名から近況をいただいたのですが、遠方のかたはべつとして、足腰の不自由のためが目につき、残念でした。締めくくりは千葉医科大

学女医第一号の窪田叔子先生で、来年もまた会おうとなりました。  
写真右から  
前列・鈴木日出和、福島通夫、富岡正光、島崎淳、窪田叔子、野口晃平、佐野迪雄、東振栄  
後列・中野夫人、若菜夫人、和田房治、佐藤忠夫、中山宗春

\*中島哲二先生は撮影後に参加しました。(島崎淳)

## 五五会 (昭30)

私達は1951年(昭和26年)に医学部に入学した新制度の第一回生です。入学当時、校門の両側には夫々千葉大学医学部と千葉医科大学の看板がかかっていました。戦後6年、未だ連合軍の占領下であり、この年の9月サンフランシスコ講和条約が調印され、翌年やっと独立となったそんな時代です。

かつて東洋一といわれた大学附属病院は威容を誇っていました。一方基礎講座の方は、多くが戦災後の粗末な木造の教室でした。教授方の多くが東大出身で、夫々独特の風貌、風格もあっておられました。講義も

試験も至極厳しいものの、のんびりとしたものと様々であったように思います。社会面では、プロ野球で赤バットの川上哲治、青バットの山下弘が活躍し、映画も全盛期を迎えていました。「羅生門」がベニス映画祭でグランプリを獲得したのがこの年です。

1955年の卒業の頃になると、テレビをはじめ電化製品の普及が世の中の生活を大きく変えていきました。「もはや戦後ではない」が流行語になったのは翌年です。

卒業後、1968年にあって、第1回の集まりを東京・柴又の川甚で開催し、30名が参加しました。1955年卒だから五五会とそのままに名付けたのですが、当時ゴーゴータンスが流行り、コント55号もテレビを賑わしていたのが思い出されます。

その後は、千葉、東京を中心に、時には級友のいる地方にも出かけて毎年継続してきました。また30周年、50周年には結構立派な記念誌を発行し、最近では、会の開催にあわせて近況報告を掲載した会報も配布しています。しかし歳月の重みは年々増して、30周年の時点で物故者10名、50周年で

32名だったのが、60周年では、半数を超える56名の級友が鬼籍に入っています。(消息不明は2名)

今年も、6月21日(日)正午から有楽町の帝国ホテルで開催されました。現存会員47名のうち出席者は20名、夫人同伴3名でした。開会に先立ち、この1年間に亡くなった浅利行男君のご冥福を祈って黙祷を捧げました。乾杯のあと和やかに会食が進みましたが、昼間のアルコールは辞退する人が多くなりました。恒例の近況報告では、お目出度い話題は余り無く、やはり自らの病気、体の衰えについての体験が多いようで、80台も半ばは、一病息災どころか多病を抱えて、お互い健康長寿の難しさを共感しました。

また、今回は、記念写真集を発行し、これは加濃君が苦勞して集めた遠い昔の恩師や学生時代の皆の姿を再現し、また卒業後の長い五五会の歩みを写真で辿ったものです。盛況の2時間は余りにも短く、2次会を予定していたのが、当日ホテル内は盛況で何処も場所がとれず、やむなくそのまま解散となりました。会の前には60周年を機に

五五会を閉じることも考えられていましたが、集まってみればやはり楽しく、これからも、有志の人たちだけでも集まりたいとの希望が多く、その方向に沿って後日、幹事会で具体的に検討することとなりました。

写真右から  
前列・野本和男、永野夫人、

伊藤夫人、伊藤敏夫、永野俊雄、滝口光雄、滝口夫人、中野政雄、吉原一郎  
後列・加濃正明、藤山嘉信、高橋康、浅見敦、秋元駿一、新井多喜男、中島和彦、伊谷昭幸、村瀬靖、後藤澄夫、清水良平、志村昭光、横田俊二、小林富久

(藤山嘉信)





さんご会 (昭35)

平成27年の「さんご会」は習志野市、千葉市合同の主催で昨年に引き続き医学部同窓会館で行われた。出席者は18名(写真の氏名に加え、早退した堀江武君)である。昨年とはすこし趣向を変え、医学部構内の桜を見ながら久闊を温めるべく3月28日(日)開催された。開会に先立ち医学部構

内の見学を行ったが、天候もよく、連絡道路を始めとする構内の桜も七分咲きで、学生時代を思い出しながらカメラにおさめる人も多い。現在の医学部研究棟の古い建物で臨床講義、臨床実習からインターン、各医局で医師としての教育を受けたクラスであり、なかには卒業後初めて大学を訪れたという人もいて、現在の医学部附属病院の各棟、さらに昨年五月竣工となった外来棟の

規模にびつくりする。事務の方に案内され外来棟と東病棟の見学をし、11階の最上階から変貌した千葉市内を眺め、再び会場に戻る。多くの新設の建物や設備に混じって、医学部研究棟の田の字の建物、旧精神科病棟、七天王塚、野球場など懐かしい風景も残っており、感懐ひとしきりであった。1時より幹事、三橋稔君の開会の辞に始まり、嶋田裕君(千葉大学名誉教授)、永田一郎君(防衛医科大学名誉教授)の叙勲を記念し、ビールで祝杯を挙げた後、宴会に移る。三橋君より差し入れの日本酒、ビールにのどを潤しながら、みどり寿司の出前料理に舌つづみをうつ。それぞれの近況報告、雑談にふける間に予定の時間はあつという間に過ぎ、桜を背景に同窓会館のテラスで記念写真を撮影し、次回は村田光範、鈴木茂君が幹事となり、時期、場所は幹事一任と決定した。出席者の全員が元気で現在何らかの医療関係の仕事をしており、約半数は週五日働いているという。戦後の粗食に耐え、授業をサボって送ったエネルギーが卒業後55年目の今も現役を続けるさんご会の原点になっている

ことをあらためて痛感した次第である。文末になるが休日にもかかわらず最後までお世話頂いたのはな同窓会事務局の清水さんほかの皆さんに厚く感謝申し上げます。 (幹事：三橋稔、成田静子、増田善昭) 写真右から 前列：三橋稔、佐藤重明、貞永嘉久 中列：谷嶋つね、成田静子、館野翠、嶋田裕、横山孝一、佐藤甫夫、海保允 後列：佐伯陳哉、高橋徹、藤村眞示、神田敬、増田善昭、永田一郎、草刈隆 (増田善昭)

参旧会 (昭39)

去る5月16、17の両日、10年ぶりに千葉での参旧会(第51回)を開催しました。16日(土)午後は、新築されたのはな同窓会館と附属病院外来棟の見学をし、その合間には、旧同窓会館跡地から記念講堂前、連絡道路を散策しました。学一時に安保闘争、学三時には東医体開催を体験した我がクラスにとって、新緑の眩しい中、静かな佇まいを見せている現看護学部教室の辺りは、国会へのデモの起点でもあれば、また熱く燃えた東医体開催時の様々な思い出の場所でもあり、半世紀前の青春の旧時を追懐しました。 成田ヒルトンホテルに会場を移しての懇親会には、本会開催約3週前に逝去された富岡容子さんが遺影と生前のパネル写真での参加ということになり、その前で各自がご冥福を祈りました。一方で、明るいニュースに、昨秋の鈴木守君の瑞宝重光章受章があつたのですが、ご本人からは受章を決断するに至る葛藤の一部(本会報前号169号に既報)が披瀝されました。 当日の参加者は、人生の伴侶7名を含め、34名でしたが、各自の近況の紹介では、病の克服談もあれば、現在闘病中の話もあり、ちよつと笑えない物忘れのエピソード等が相次ぎ、参加者一同、健やかな日常の重要さを再認識しました。 翌17日(日)は、成田山新勝寺参拝や少し元気な者は成田山公園の散策後、バスで香取市に移動し、伊能忠敬記念会館見学後、昼食にうな重を食し、千葉駅に戻り解散となりました。来年は鈴木君らの尽力で群馬での開催が決定しました。 写真右から



前列：遠藤毅、計見一雄、塚田夫人、重松夫人、山下明美、本村八恵子、富岡玖夫、永山恵美子、川西恭子、木内政寛、高根健、三浦夫人 後列：崎山樹、飯田義信、重松秀一、碓井貞仁、三浦徹蔵、塚田正男、林學、山下武広、河野守正、滝沢和彦、伊藤晴夫、深尾立、上原朗、万本盛三、鈴木守、大塚夫人、高根夫人、万本夫人、碓井夫人、大塚嘉則 (村上信乃、今野貞夫は都合により途中退席)(崎山樹)



さんろく会 (昭36)

今年のさんろく会は、母校見学、連絡道路のお花見、入学60周年をテーマに、平成27年4月5日(日)、総勢35名(内、夫人参加4名)で開催した。あいにくの小

雨模様であったが、集合場所の附属病院玄関を日曜日にも拘らず、我々の為に病院総務課職員の方が早々に開けて下さったので、先ずは新外来棟の見学。写真のように明るく広々とした空間に級友達の評判は上々だった。写真撮影後、桜が満

開の連絡道路でお花見。満開の桜のアーチをくぐり抜け、医学部長・横須賀教授のご高配により医学部本館(旧病院)の後側から、一内科新井誠人医局長のご案内で、相変わらず重厚な雰囲気を保っている旧病院玄関へと同級生の一団は歩を進めた。一部級友達は玄関の階段を昇り降りし、往時を懐かしんでいた。しかし、何故か新同窓会館については、外観を見るだけでいいと、そのまま用意されたタクシーで会場の京成ミラマーレへ向かった。思えば私たちの60年前の入試は、学制改革で6年制医学部が発足して初めての事だったせい、記録的な入試志望者のため競争率は、36・3倍。その難関を突破した戦友達は、今や80歳前後。会場の京成ミラマーレに着いて間もなく、3月に急死した現役の清泉女学院大学学長吉川武彦君(国立精神・神経医療研究センター、精神保健研究所名誉所長)、元県立リハビリセンター長村田忠雄君の冥福を祈り、黙祷を捧げた。

の合唱で一挙にお祝いムードとなった。前嶋清(元小見川中央病院院長)の名司会のもと、会食と歓談で会は順調に進行した。楽しかった一日は、関幸雄元川鉄病院院長の閉会の挨拶でお互いに別れを惜しみつつ帰途についた。今回もさんろく会が順調に楽しく開けたのも、案内状等すべての連絡を一手に引き受けてくれた黒田健昭元印旛郡市医師会長と、黒田内科タリニックススタッフのお蔭で感謝、感謝である。尚、次回さんろく会は、小池宏之君の幹事で、越後湯沢温泉の紅葉の時期(来年)を考えている。

(幹事：加藤昌義、黒田健昭、近藤省三、齋藤利隆、青木謹、関幸雄、長谷川修司、前嶋清、松本一暁) 写真右から 前列：吉井逸郎、諏訪部博、松本一暁、近藤省三、青木謹、前嶋清、黒田健昭、齋藤利隆、加藤喜市 二列目：小池宏之、塚原夫人、中田義隆、三宅伊豫子、田部井夫人、野尻雅美、副島訓子、小野沢君夫、長谷川修司、鈴木伸典、長谷川幸子、加藤昌義 三列目：山角博、藤塚立夫、横山健郎、関幸雄、塚原重雄、田部井徹、谷口滋、鈴木



附属病院新外来棟



連絡道路の桜並木



Yoshindo

アミノ酸・水溶性ビタミン加総合電解質液 処方箋医薬品<sup>®</sup>

**パレプラス<sup>®</sup> 輸液**

PAREPLUS<sup>®</sup>

●薬価基準収載  
注) 注意-医師等の処方箋により使用する  
「効能又は効果」、「用法及び用量」、「禁忌を含む使用上の注意」等、詳細は製品添付文書をご参照ください。

0120-647-734 受付時間 9:00~17:30 (土、日、祝日を除く)

製造販売元 **エイワイファーマ株式会社**  
東京都中央区日本橋浜町二丁目31番1号

販売元 **株式会社 陽進堂**  
富山県富山市瑞中町萩島 3697 番地 8 号

業務提携 **味の素製薬株式会社**  
東京都中央区入船二丁目1番1号

ちよに会 (昭42)

今年のちよに会は4月11日(土)、午後6時半から那覇市のホテルで行われた。初めて沖縄での開催であり、遠方ということもあって一泊二日のゆったりした日程であった。例年は6月の初旬に開かれるが、沖縄ではその頃は梅雨の時期であり、さらに台風シーズンや猛暑等を考慮して4月の開催になった。学会などと重なったせいか残念ながら参加者は13人と少なく、その中で栃木の福田君は病を押して来てくれたが、ホテルに着いても体調が勝れず、心配して付き添って来られた奥さんと医師のお嬢さんにホテルの部屋で点滴治療等を受ける事になり、参加者全員でホテルの部屋に見舞いに行った。会場に戻って開催前に福田君を除いて参加者全員の記念写真の撮影が行われ、その後でいよいよ「ちよに会」の開催となった。初めに、安田君が沖縄の激戦地の南部戦跡を回って来て感じる処があったようで、全員で黙祷をした後で乾杯をして会が始まり、和やかな雰囲気の中で食事会が進んで行き、しばし歓談の後で何時ものように出

席者全員の近況報告となった。相変わらず豪放磊落な更科君から始まって3名の女史の方々の静かな心境報告と続き、伊藤君が旅先で



ばったり級友に出会った話、門馬君は今も海外を旅しているそう。クラス会の翌日にも再び海外へ出かけるとの事であった。いつも静かな語り口の忍頂寺君、最近

はゴルフを控えてサイクリングに取り組んでいる森田君、日々の診療を通して研究に取り組んでいる安田君の話があり、関君と中島君が今後の我が国の医療の不安を話していると、伊藤君や安田君達も議論に加わり、和気あいあいの中にも

白熱した議論が交わされて、いつ果てるともなく続き、私はお開きの宣言を3回もした程であったが、まだまだ皆が一線医療で活躍している事を実感した。来年は伊藤君が幹事と決まってお開きになった。翌日は生憎の雨であったが観光に出かけたりゴルフに興じたり、それぞれに思い出を作って帰られたと思う。なお、福田君は帰宅して元気を取り戻されていた。

写真右から  
前列：坂庭操、片桐博子、大内美南、徳久剛史、中列：早乙女勇、矢加部茂、安野憲一、竹中正治、木村秀樹、大橋教良  
後列：南昌平、秋葉哲生、川上義、梅田透、川口英昭、灘岡壽英、野村馨、山本義一 (坂庭操)

42-48 クラス会

平成27年5月23日に東京の学士会館で開催しました。土曜日開催のため、現役で働いている同窓生が多く、参加者は18名にとどまりました。



平成27年3月21日春分の日、「千葉大学医学部昭和49年卒とその級友の同窓会」

ツフェ形式で行われました。ちょうど2年ぶりの同じ会場での開催で、前回よりやや減少したものの遠くは北海道からの唐澤(里見)さん、秋田県からの桜庭君など出席42名のにぎやかな会になりました。受付で前回と同様にくじ引きで「乾杯」「スピーチ1〜4」「中締

この後くじを引き当てた菅野君、小出義雄君、坪井君、弓削君のスピーチが続きました。記念撮影はあらかじめ機材の準備を依頼してあった菅野君が、快く引き受けてくれましたが、会場の中央にツフェのため大きな鳥状のテーブルがあり、菅野君はテーブルの上に三脚をセットしなければならず大変でした。

次に浅井君から本会の名称について提案がありました。すなわち、会の名称が長すぎて使いにくいこと、「49年卒」の文言に違和感を覚える声もあり、故山下道隆君が作って皆が読んでいたクラス会誌「三本の指」にちなんで「三本の指の会」にしてはどうかというものでした。これについて「三本の指の会」あるいは「三本の指の会」といった提案もありましたが、結局「三本の指の会」が多数の賛成で採択されました。



次期幹事は長谷川君と、西山(藤原)さんが引き受けてくださることに、午後3時半過ぎに長谷川君の中心のあいさつで、元気で締めをのこして別れを惜しみつつ散会しました。

写真右から  
最前列…小出義雄、唐澤直子、遠藤富士乗、坪井秀一、西野薫、田邊政裕、野村恭子、西山眞理子、衣川直子、菅野治重  
2列目…河田誠、木村道雄、酒巻建夫、小出博義、斉藤

万比古、保坂泰昭、土佐純一、佐藤茂樹、入江澄子、武藤高明、小林裕夫、伊藤国明、安東昌夫  
3列目…桜庭庸悦、大塚裕石神博昭、奥村俊子、長谷川純、増村道雄、佐藤武幸、青柳博、北野慎一郎、有田正明

五二八会 (昭58)

最後列…小浜知美、弓削一郎、片桐誠、五月女直樹、館野純生、高原善治、山口英明、浅井隆善、入江氏康 (有田正明、伊藤国明)

ピンクレディがカルメン77を歌っていた昭和52年に入学、または東京デイズニールランドが開園した昭和58年に卒業、そんな時代に亥鼻で共に医学を学んだ仲間が集まるのが「五二八会」です。今年が第3回目の開催で、昨年附属病院長に就任した山本修一君、現在千葉大に在籍して頑張っている、岩立康男君、近藤克則君、滝口裕一君の音頭で開催が決まり、34人が集まりました。

会に先立ち、昨年オープンした附属病院の新しい外来棟の見学会が催されました。我々が実習した病棟に「棟」がまだ使われている

ことにほっとしながらも、最新の医療を安心して受けられる環境が、どんな整備されていることに驚き、こんな病院で働いてみたかった、患者になるならこんな病院に通院してみたい、などといった感想が多数聞かれました。

その後、京成ホテルミラマールに移動し、山本君からは、これからの亥鼻地区の夢溢れる構想についても説明してもらい、母校が益々発展していきそう、卒業生として、誇らしい気持ちにさせてもらえました。しばし昔話で盛り上がったのち、参加者の近況報告が始まりました。第1回目の「五二八会」では、持病の話を延々する者が続出して時間が足りなくなってしまう経験があり、以後の会では、「病氣自慢は法度」ということになっています。

この掟のおかげで、皆から元気で楽しい話をたくさん聞くことができました。年齢的に、各病院、あるいは医師会で責任のある仕事をしている話、子供が研修医になっている話もありましたし、忙しい中にも、趣味の時間を作り、まだまだ若さを保っている話など、色々な近況を聞くことが出来ました。また、星野和彦



君からは、入学当時定期的に発行し、教授インタビューなどを掲載していた瓦版(77M新聞)のコピーを配ってもらいました。ワープロがない時代の手書きの原稿であり、そんな時代もあったと若い頃を思い出させてもらいました。そのまま、大多数の参加者が2次会に

なだれ込み、話は尽きませんでしたが、3〜4年後、多くの仲間が還暦を迎える頃に再会しようと、次回の開催を決めて解散となりました。

写真右から  
前列…中村貢、岩立康男、中川宏治、剣持敬、山本修一、近藤克則、中郡聡夫、小宮山伸之、和田佑一、二列目…森明子、山崎俊司、長門義宣、中島弘道、大谷地直樹、山下純男、今田進、景山雄介、西村元伸、滝口裕一  
三列目…加藤雄一、星野和彦、日野剛、森聖二郎、星誠一郎、野本実、鈴木俊英、桑原洋一、佐藤好範

平成ゼロヨン会 (平成4)

最後列…後藤茂正、森田昌男、丸山浩、井合洋、田島和幸、横内敬二 (佐藤好範、西村元伸)

昭和61年入学・平成4年卒業の学年ではあるものの、図らずも入学年度、卒業年度が異なってしまった方も参加していただけるよう発足した、千葉大学医学部平成ゼロヨン会。その2回目の同窓会が、平成27年6月20日に有楽町の国際フォーラムにて行われました。この会の発起人である、千葉大学フロンティア医工学センター准教授、川平洋君の開会の挨拶と、千葉大学安全管理機構講師、潤間(渡辺)勸子さんの乾杯の掛け声で、37名の級友と稲葉(生月)元子さんのご令嬢1名を加えた38名で、会が始まりました。懇親の後、会を

会に先立ち、昨年オープンした附属病院の新しい外来棟の見学会が催されました。我々が実習した病棟に「棟」がまだ使われている



盛り上げるべく世話人手書き(一!)の垂れ幕をバックに、4人の教授就任お祝いの発表が行われました。

渡邊博幸君  
(千葉大学社会精神保健教育研究センター 治療社会復帰支援研究部門 特任教授)

緒方直史君  
(帝京大学医学部リハビリテーション科 教授)

真村瑞子さん  
(東京医科大学分子病理学)

教授 韓国国立慶北大学  
内科学 兼任教授)

熊野浩太郎君  
(東邦大学医療センター佐倉病院 内科 臨床教授)

会場が国際フォーラムかつ発表者が教授陣ということもあり、学会発表のごとくスライドを事前に準備したプレゼンテーションです。

渡邊博幸君には専門のうつ病に関してユーモアを交えての発表を、緒方直史君にはリハビリテーション科と

整形外科の違いに關しての発表を、真村瑞子さんには東京医科大学と韓国国立慶北大学の比較についての発表をしていただきました。

自己紹介・教室紹介をそれぞれ面白おかしくそして熱く語るプレゼンテーションに会場は大いに盛り上がり、3名には花束と千葉大学校章入りのクリスタルトロフィーを記念品として贈呈し、3名ともご満悦の様子でした。また、世話人の失態で発注に間に合わなかった、熊野浩太郎君は次回以降に発表と記念品贈呈ということとなりました。その後、参加した級友全員の挨拶が行われ、それぞれ仕事での苦労話や趣味での自慢話に花が咲きました。「同級生同士なんだから、吉報があれば何でも褒め称えよう!」との精神で、自動車レース「2015もてぎENJOYミニ耐久レース」で3位に入賞した、太田詔君にも控えめなトロフィーを記念品として贈呈いたしました。

2次会は新東京ビル地下のワインバーに場所を移し、静かな落ち着いた雰囲気のパイにもかわからずシャンパン飲み放題のため些か飲みすぎるほど飲み、別の意味で盛り上がりました。また今回の同窓会の残金の一部を、のびな同窓会へ寄附させていただきます。事後報告となりますが、同級生の皆様にご了承いただければ有難いです。

写真右から  
前列：高瀬一嘉、池田雄次、潤間(渡辺) 励子、熊野浩太郎、真村瑞子、渡邊博幸、緒方直史、川平洋、山本正二、相庭温臣

2列目：太田詔、中澤健、須藤英文、中澤(石川) 伸子、三田(寺本) 奈津子、澤井まゆみ、稲葉(生月) 元子、獅子原(藤田) 薫子、山崎健也

3列目：遠藤恒宏、篠藤浩一、白石博一、山本雅史、小泉健一、鈴木一広、櫻井健一、木村真二郎

最後列：伊藤藤一、亀高尚川名浩一郎、矢島利高、富田和宏、井上淳、谷嶋隆之、服部祐爾、加藤佳瑞紀、杉田達哉

(高瀬一嘉)

お詫びと訂正  
169号  
5頁  
人事異動  
教授

予防医学センター  
佐粧 隆久→佐粧 孝久  
33頁  
平成27年度医学部入学者  
萩野 智大→萩野 智大

お詫びして訂正させていただきます。

### 十三周年亥鼻祭開催のお知らせ

亥鼻祭実行委員会委員長

医学部四年 梅田 開

来たる10月31日(土)、11月1日(日)の二日間に渡り、本年度も亥鼻祭を開催する運びとなりました。亥鼻祭とは千葉大学亥鼻キャンパスにおいて行われております医療系大学祭で、医学部・看護学部・薬学部の三学部が共同して実施しております。医療系キャンパスという特徴を活かして、医療系らしい企画や趣向を凝らし行っております。

例えば、身体ふしぎ発見という企画では血圧測定や骨密度測定、実際の豚の臓器に触れて身体についての理解を深められるようになっております。また、看護のすすめという企画では、身近な手洗いの仕方や体位変換の仕方、車いすを實際に用いてその使い方について学べます。さらに千葉大学を志している受験生に向けて、受験相談を通じ亥鼻キャンパスの生活について興味を持ってもらう企画も実施しておりますし、医療系有名人講演会という企画では医療者の方に講演を行

明日の健康をめざして

# 扶桑薬品工業

扶桑薬品工業株式会社 ●本社/大阪市中央区道修町一丁目7番10号  
本社事務所/大阪市城東区森之宮二丁目3番11号

追 悼

小幡裕先生のご逝去を悼む

あのはな同窓会長 済 陽 高 穂 (昭45)



本年、平成27年3月14日、東京女子医科大学名誉教授・前東京あのはな会長の小幡裕先生が87歳をもって旅立たれました。先生は京都府宮津のお生まれで、旧制浦和高等学校から千葉大学医学部に進まれ、昭和28年のご卒業でした。3月20日にお通夜、同21日にしめやかに営まれた告別式では、3名が弔辞を読まれ、まず郷里舞鶴中学での同級生の方が幼少時代の思い出を、次いで旧制浦和高等学校から千葉大学医学部卒業まで同級生であった井上幸万前大宮市医師会長(中山外科)が青春の友情やエピソードを、最後に小幡先生の消化器病センター内科後継者である林直諒東京女子医科大学名誉教授が先生の数々のご偉業を述べ、永年のご指

導に深甚なる感謝の言葉を捧げられました。先生は医学部卒業後第一内科に入局、都立豊島病院を経て、昭和44年に先輩である名尾良憲先生が東京女子医大客員教授に就任される際、一緒に消化器病センター内科講師に着任されました。昭和40年に中山恒明教授が創立された消化器病センターでは、当時内科教授として東大より来られた近藤台五郎先生や内視鏡の大家・竹本忠良先生が活躍されており、肝臓などの実質臓器の分野での研究を目指して囑望されたのでした。その方面では、病態生理研究室である東研究室で浜野恭一、御子柴幸男先生(共に昭和33年卒)たちと連日深夜にも及ぶ議論、そして当時解明されていかなかった肝炎研究のために、台湾、インドネシア、エジプトまでもに調査旅行をされました。

昭和50年消化器内科教授、昭和54年同主任教授に就任、平成5年に退任されるまでの14年もの間、教室を主宰され、数々の業績を挙げられ後進の指導に当たられました。学会でも平成2年、消化吸収学会や肝臓学会東部会、平成4年には日本消化器病学会教育講演会などを主催し、平成3年から3年間、難病中の難病である食道静脈瘤を対象とした『門脈血行異常症』の厚生省特定疾患研究班の班長も務められました。また肝炎・肝硬変・肝がんを中心とした幅広い研究は『肝がん腫瘍マーカー』、『PBC肝移植適応基準』、『門脈圧亢進症の免疫学的検討』などの難関解明への多大な貢献をされております。

昭和63年東京女子医大理事に就任されてからは、中山恒明、榊原伸先生の両巨頭の後を受けて東京女子医大の発展、舵取りに大きな足跡を残され、これは故浜野恭一専務理事(東京女子医大二外科教授)に引き継がれました。千葉勢の東京、特に東京女子医大での活躍の橋頭堡として努力されました。

東京あのはな会において平成15年、貫洞一夫先生のとを受けて会長に就かれ、在任4年間に洗練された感覚で会員を牽引され、唐澤祥人日本医師会長実現にもあのはな会員ととも一丸となつて尽力されました。

先生とのご縁は私が昭和45年に東京女子医大消化器病センター外科に入局した時に遡りますが、昭和49年、社会保険山梨病院がその運営全般を消化器病センターに依頼されてから、私も外科要員として1年間出張、小幡先生も助教授の身でありながら、他内科講師の先生たちと3カ月交代の出張をされ、外科・内科殆ど一緒に協力体制で日夜診療に当り、夕暮れ時となると甲府・裏春日の巷間で痛飲し、親しくさせて戴いたのがはじまりです。山梨の風土病である、地方病(日本住血吸虫症)などの解説を拝聴し、また小人数の医局のため内科診断が下ると直ちに外科の出番で、数多くの手術を経験できたのも、小幡先生のお陰でした。消化器病センターでは『済陽君、東京あのはな会に出て来てくれ』とのことで、浜野先生共々楽しく参加させていただき、会合準備のお手伝いなどをするうちに、平成19年以降小幡先生の後任として微力を尽くしている次第でした。また私が平成20年に西台クリニクを引き継いだ後は、特別顧問として毎週出勤され、大所高所からのご指導を賜り、奥さま共々クリニクの運営にお力添えを頂き心より感謝致しております。

先生は名尾良憲、貫洞一夫、中山恒明先生などの良き先輩、また友情溢れる同僚、優れた医局員に恵まれ、すばらしい人生を送られました。そして母校とあのはな同窓会を愛し、また東京女子医大と消化器病センターの事を常に心にかけて、我々後進の者に暖かい眼差しをもって激励されたのです。

『願わくば 桜のもとに春死なん』西行法師を地で行かれました。あのはな会の重鎮を失つて我々は迷える羊となりました。もうしばらく、御一緒に語らい、お酒をたしなむことができたならと、無念の気持ちです。

吉川武彦君を偲んで

中 田 義 隆 (昭36)



昨年10月のクラス会には出席し元気だったと聞いていたのに、今年3月27日の訃報「吉川武彦氏(清泉女子大学学長、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所名誉所長) 21日心不全のため死去。79歳」をみて、大変驚きました。今回、追悼文の依頼を受け、他に相応しい人がいるのではと悩みましたが、同級生で、かつ同じ精神科へ入局した仲間という縁もあり、さらに、5月9日の「吉川武彦さんお別れ会」で、彼の足跡に改めて触れ感銘を深くしましたので、私の知る彼の一端でもお伝え出来ればと思います、筆をとりましょう。

水府流の平泳ぎを彼から習いましたのも懐かしい思い出です。彼が琉球大学の学生部長のころ、医学部創設に尽力していた彼を訪問したことがあります。当地での彼の精力的な活動に目を見張りました。しかし夕食の際にふと漏らした「ここにいると、イワシやアジのような小魚が無性に食べたくなることがあるんだ」の一言に苦労の一端と館山の海への想いが伝わってきました。2011年秋、卒後50周年祝賀会に寄せた一文に「60年安保の年が最終学年、国会へのデモは精勤。樺美智子さんとは知らずに彼女を担ぎ、わが方の医務班へ。最後の脈を取ったのは○○君。闘争仲間から自殺者が多数出たので、弔い合戦とばかりに自殺研究を始め、50年・以下略。」文末に、「熟れたるをよとして柿ひとつもぐ 游子」とありました。千葉大学医学部の俳句の会(やはぎ)に属し、游子と号していたことを、最近の三枝一雄先生(昭34)

学生時代、吉川君は夏になると千葉県館山で水泳に明け暮れていると聞いていました。ある夏の一日館山の海岸で、同級生と一緒に

そのクラス会で吉川君と久しぶりに長話をしました。彼は多くの職場を変わったと述懐していましたが、やるべきことは一貫していることに強い印象を受けました。

それは彼のいうところの、知的あるいは精神的障害のある人達への「肩をいからせないノーマライゼーション」に向けての地域生活支援の実践という事なのでしよう。彼の活動の範囲は、精神病院の改革、現場で働く職員への教育・指導・相談、対象となる人たちに具体的に手を差し伸べるといふ事、さらには法の整備への尽力までと多岐にわたっています。このことは、参加者400人を越える「お別れの会」での水泳の水流、国立精神・厚労省、知的障害者育成会の各関係者など多くの人達のスピーチからも活動の幅の広さが伺えました。中でも、知的障害のある人にも当たり前の旅の楽しさをを目的に国内外の青年の旅に30年以上同行していたことも知り驚嘆を新たにしました。

当日の資料によると、著書は179、かかわった白書は精神薄弱者問題白書、発達障害白書、厚生白書、

精神保健福祉白書とあります。

彼は2012年春に瑞宝中綬章を受章しています。

その挨拶の一部を紹介しましょう。「この度の褒章が、国立の研究所長を務めたからというのではなく精神障害者のみならず知的障害者や認知症高齢者の地域生活支援への関わりを誉めていただいたものならば有り難くお受けしたいと思つた次第です。」(2012年9月11日発行の同窓会報第161号より)ここに彼の姿勢が集約されていると思います。

当日は、千葉大学精神科関係で出席した佐藤壹三郎教授(昭21)、宮代(旧姓濱村)道子さん(昭36)、小野幸雄君(昭37)、熊田正義君(昭38)と共にありし日の吉川君を偲びました。

「梅の香を纏ひ 卒然と游子去る」これは「やはぎ会」の句友で1年後輩の小野幸雄君の献句です。

吉川武彦君は千葉大学医学部の誇るべき先達の一人です。私の拙文でその一端でもお汲み取り頂ければありがたく存じます。

### 宮治誠先生を偲んで

西村和子(昭40)



宮治誠先生(千葉大学名誉教授、元真菌医学研究センター長)は2015年3月8日に77歳で永眠されました。宮治先生は1937年4月6日に川崎市に生まれ、川崎高校を卒業。1963年3月に千葉大学医学部卒業、日本鋼管病院インターンを経て同大学大学院医学研究科を修了し、医学部皮膚科助手、国立習志野病院皮膚科医長、千葉大学腐敗研究所助手、生物活性研究所助教授を歴任後、1977年に同研究所教授に昇任されました。大学院時代の前半2年間は腐敗研究所で病原真菌の研究をされました。所属は食品細菌を専門とする腐敗研究部でしたが、主任教授の藤原喜久夫先生の御理解のもと、深在性皮膚真菌症の原因菌の研究を始めました。なぜ、腐敗細菌を専攻とする研究

部で病原真菌の研究を一人始めたのですか、とお尋ねした所、宮治先生いわく、医学部卒業間際に整形外科の鈴木次郎教授に「君はバドミントンばかりやっていて勉強をしなかつたが、運動部の学生は卒業後よく勉強して伸びる者がいる、君も頑張りなさい」と言われたこと、もう一つは千葉大皮膚科で誰も手をつけていないカビ(真菌)を専攻すると言えば大学院に受かると思つたからだそうです。学部では単位を落とさぬ程度の勉強しかしなかつたので、大学院時代は一所懸命研究をするに決心、学位を取得した後は臨床に戻り、開業するつもりであつたそうです。

し、菌種を調べ、白癬、皮膚カンジダ症、スポロトリコーシス、クロモミコーシスの診断を確立されました。同時にカンジダの病原性と発芽管形成能の関係、慢性粘膜炎皮膚カンジダ症(CMCC)における液性抗体の著明な上昇、副甲状腺機能低下など後に先天的な細胞性免疫不全とCMCCの関係を示す先駆的な研究をされました。大学院修了後はアスペルギルス症、クリプトコックス症、深在性皮膚真菌症における細胞性免疫能の役割をヌードマウスの実験感染によつて明らかにされました。先生は1979年9月から1年間、米国の疾病管理センター(CDC)に文部省長期在外研究員として滞在され、毒性の強いバイオセーフティレベル(BSL)3の真菌による感染症の研究に着手されました。ちなみに、これらの感染症は海外では風土病として発生し、日本には常在しないので、輸入真菌症と総称したのは宮治先生です。当時はBSL3と日和見真菌の専門家は極めて限られていたので、全国から重症真菌症の診断相談を受け、分離株の種同定を研究所から改組された真菌

医学センターには病原性真菌が集積され、国内では唯一のBSL3の真菌を保存、研究する拠点に育て上げ、種々の菌種を用いて分子系統・分類学、同定、分子疫学研究へと導きました。先生は国際交流にも力を注ぎ、特に中国、ブラジルからは多くの研究者、留学生を受け入れ、病原真菌・放線菌の共同研究を遂行し、多くの人材を育てました。それに伴い病原真菌・放線菌の保存事業は世界的に見ても有数な規模となりました。その間1987年に生物活性研究所廃止から真核微生物研究センターの新設、10年時限の前後各4年間、1997年の真菌医学研究センターへの改組後の2年間1999年までセンター長を務められました。

最後に瑞宝中綬章を受章された事を謹んで報告し、心から御冥福をお祈り申し上げます。

合掌

同窓会員のご逝去に際し、  
弔文の掲載をご希望される方は、  
同窓会本部へ原稿をお送り下さい。

# 研修プログラム

## 循環器内科

千葉大学医学部附属病院  
循環器内科

助教 高岡 浩之 (平14)

千葉大学大学院医学研究院  
循環器内科学

教授 小林 欣夫 (昭63)

### 循環器内科の特徴

当科は、地域医療から最先端研究まで、をモットーに、個性豊かな循環器内科医の育成に努めております。この目標を達成するため、医学部の役割とされる臨床・研究・教育の3つの分野を個々の適性に合わせて分業し、いずれかのエキスパートとなるべく個々の力を最大限集中できる体制を整えています。臨床担当は大病院の使命である高度・最先端医療を中心に行い、研究担当が最先端の研究を全世界に発信し、教育担当が学生・研修医の教育を充実させており、世界トップクラスの教室を形成すべく日々努力しています。

臨床担当については、冠動脈疾患治療部、不整脈、画像診断、心不全、血管再生治療の5つのグループが存在します。当科の中核をなす冠動脈疾患治療部では、主に急性心筋梗塞症などの虚血性心疾患を対象とした心臓カテーテル検査・治療を専門としています。小林欣夫教授就任後に同検査・治療件数は飛躍的に増加し、平成25年度の経皮的冠動脈形成術件数は390件と国立大病院ではトップクラスに入ります。同部門スタッフは国内外からライブデモンストラレーションを依頼されるなど、その技術は世界的にも認められています。周辺施設からは通常のカテーテル治療では対処が困難な慢性完全閉塞病変を有する症例なども数多くご紹介頂き、良好な治療成績をあげています。

不整脈グループでは、不整脈疾患に対するカテーテルアブレーション治療や、ペースメーカー・植え込み型除細動器等を用いたデバイス治療、薬物治療を行っています。カテーテルアブレーションの件数は年間約250件、デバイス植え込みは年間約200件と、こちらも国立大病院においてトップクラスに入ります。画像診断グループでは、心臓超音波を中心に、質の高いR1も数多く行っています。さらには施行可能施設に限られる心臓をターゲットにしたPETやMRIに加え、CTは現在第2世代の320列CTを導入し、非侵襲的な冠動脈評価を行っています。

心不全領域では、近年補助人工心臓の臨床応用が進み、従来は救命が難しかった重症心不全の治療が注目されております。当科の臨床心不全グループでは、心臓外科と協力して、心移植治療を見据えた県内でも屈指の質の高い内科的管理を行っております。

血管再生治療については、閉塞性動脈硬化症などの重症の下肢虚血性疾患に対し、厚生労働省から高度先進医療として認可された末梢血単核球細胞の移植治療を行っており、当科では既に120名をこえる数多くの治療実績があります。

また、これらの各臨床グループは数多くの臨床研究も行っており、国際学会等における多数の研究発表や論文報告も行っていきます。基礎研究グループでは心不全の病態解明や新規治療薬開発、さらにはiPS細胞で近年話題の再生医療に注目し、種々の細胞ソースを用いた移植医療や、内因性の心筋再生・保護促進機構の解明による心筋再生治療の開発を目指しています。こうした基礎研究を広く臨床応用につなげるべく、前述の血管再生治療のようなトランスレーションリサーチも盛んに行っています。基礎研究グループの大学院生の研究内容は世界一流の科学雑誌 (Nature, Nature Med, Nature Cell Biol等) に掲載されており、その業績は国内外で高く評価され、多くの学会等で受賞もしています。

当科における研修プラン  
平成23年4月より当科では初期研修プログラムの大改革を行い、病棟研修と臨床検査研修を半日ずつ行うことを原則としました。臨床検査研修では、心エコー、床検査研修では、心エコー、各種画像診断 (CT・核医学等)、不整脈・運動負荷、心臓カテーテルの4種類の主要循環器検査を1週間単位で研修します。例えば、心エコー担当の週では、午前中は毎日心エコー研修で、午後は病棟勤務となります。これにより従来の初期研修は病棟業務に偏重しがちでしたが、循環器内科業務全般の研修が可能で手技的な部分も多く学べると大変好評です。さらに、当科では初期研修医に積極的に学会発表することも薦めており、当科をローテートした研修医の多くが日本循環器学会地方会で症例報告を行っております。本年3月に開催された千葉大学医学部附属病院全体の研修報告会では、当科症例を報告した研修医の先生が最優秀賞を受賞されました。

臨研修終了後に入局した場合 (卒後3年〜4・5年目) は、都内・千葉県内関連施設での循環器内科医としての専門研修を行います。その後は、博士課程への進学や海外・国内留学などのコースが選択可能です。多くは大学院へ進学後、各自希望のテーマに応じて、前述の各臨床ないし研究グループに所属します。大学院へ進学しない場合は、千葉大学附属病院の医員 (研究生) となります。大学院生に帰局した若手医局員と、教官クラスの指導医がペアで病棟症例を担当し、初期研修医や病棟実習中の学生の指導を行います。若手医局員は病棟症例を担当する傍ら、自らの専門分野の研究を積み、専門医取得に備えます。大学院生はこの半年〜約1年間の病棟研修後は、選択分野の研究に専念可能です。冠動脈カテーテル治療、不整脈治療等、循環器専門医に必要な全ての分野のトレーニングが可能で、さらには大病院でしか経験できない、再生治療などの高度先進治療を担うこともできます。大病院にはこうした各領域のエキスパートが存在し、その指導を受けることができるのは大きなメリットです。

大学院修了後の進路は、海外施設 (最近ではCardiovascular Research FoundationやStanford大学等) や国内施設へ留学する、大学に残りさらに研鑽を積む、または各自希望の関連病院に就職するなど本人の意思を尊重し、多様性に富むのが当科の特徴です。教官の多くは海外留学を経験しており、各専門領域における世界屈指の施設でトレーニングを積み、帰国後はその経験を活かして大学院生の指導にあたっています。

当科には女性医師が以前から数多く在籍し、現在海外留学中、留学経験者、さらに現役の女性教官が主要学会の評議員として活躍しています。女性医師の出産や育児などと業務との両立については医局全体が気を配り、希望の勤務体系が選択可能であり、多様な形で臨床技術の習得や学会での活躍が可能です。

当科は前述のように、地域医療から最先端研究までを達成すべく、臨床担当は高度・最先端の臨床を、研究担当は最先端の研究を行っています。このため、臨床を主にやりたい、研究をしたい、など、個人の希望に沿った様々なキャリアプランを提供できます。将来的にも多くの関連施設から勤務内容を理解した上で勤務先を選択できるため、就職選択の幅を確保できます。さらなる当科関連情報につきましては当科ホームページにも詳細に記載していますので、そちらもぜひご参照頂ければと考えます。



### 国保直営総合病院 君津中央病院

病院長・千葉大学臨床教授  
鈴木紀彰(昭50)

君津中央病院は千葉県木更津市にある公立病院です。病床数661床、40科ありの外来を運営し、医師・歯科医師が120名在籍し、約30名の初期研修医と共に診療にあたっています。地域の基幹病院として、救命救急センター(3次救急、ドクターヘリ事業拠点病院)、小児救急医療拠点病院、地域周産期母子医療センター、地域がん診療拠点病院、第二種感染症指定医療機関などの認定、指定を受けています。当院の重点医療分野は救急医療(外傷、冠動脈疾患、脳血管障害をはじめとする救急診療に対応し、連日8系統の当直体制を敷き他にオンコールシステムを採用)、がん治療(初期診療から終末期医療まで)、および周産期医療(産科、新生児科、小児科診療)です。

当院の初期研修は医師法による旧制度の臨床研修施設指定病院に始まり、現行の制度となつてからは、現在まで当院独自のプログラムの他、千葉大学とのたす

### 鈴木紀彰(昭50)

き掛けのプログラムを続けています。当院のプログラム構成は以下の特徴を持ちます。

- 1 個々の研修医のニーズに合わせたカリキュラムを作成しています。必修、選択必修、選択科目の全般の診療科選択や研修順序につき可能な限り調整しティラ1メイト研修をめざしています。
- 2 豊富な症例と多数の指導医による充実した研修を実施しています。平成26年度は一日平均入院数550名、外来数1100名を診療しています。
- 3 プライマリーケア、救急医療研修の充実を図っています。地域医療として本院より規模の小さい分院などの勤務や、本院での研修科の副直および週末のER当直の実施および選択科目としての総合診療科の研修を行っています。
- 4 本院のみで賄えない部門、すなわち精神科(2箇所の研修協力病院)、腎臓内科(研修協力病院を整備中)、地域医療(富津市の分院に

加え2次医療圏内と北海道に各1箇所の研修協力病院を整備中)、地域保健(保健所)に関し協力施設を整備しています。

当院の千葉大学医学部卒業者は79名で以下の通りです。

- 緩和医療科：鈴木紀彰(昭50)、病院長、神経内科：藤沼好克(平15)、片桐明(平16)、循環器科：氷見寿治(昭55)、医務局長、山本雅史(平4)、松戸裕治(平6)、関根泰(平8)、芳生旭志(平13)、外池範正(平14)、橋本理(平24)、内分泌代謝科：石橋亮一(平19)、呼吸器内科：篠崎俊秀(昭57)、寒竹政司(平14)、松山亘(平22)、鹿野幸平(平24)、宮坂悠惟果(平24)、消化器内科：福山悦男(昭36)、企業長、畦元亮作(昭58)、吉田有(平3)、大部誠道(平7)、藤本竜也(平14)、近藤孝行(平18)、泉水美有紀(平24)、小児科：諏訪部信一(平3)、木下香(平11)、高田展行(平14)、新生児科：大曾根義輝(昭62)、富田美佳(平9)、佐々木恒(平11)、藤田真祐子(平21)、外科：海保隆(昭57)、柳澤真司(昭60)、中田泰幸(平16)、川口留以(平22)、形成外科：重原岳雄(昭58)、有川理紗(平



- 20)、整形外科：大塚誠(平7)、蓮江文男(平9)、神谷光史郎(平18)、脳神経外科：須田純夫(昭52)、副院長、岡陽一(昭56)、副院長、田島洋佑(平17)、奥山翼(平成23)、呼吸器外科：飯田智彦(平4)、豊田行英(平22)、心臓血管外科：須藤義夫(昭55)、池内博紀(平24)、小児外科：大野幸恵(平17)、産婦人科：小林治(昭51)、平敷好一郎(平9)、新井未央(平22)、糸井瑞恵(平23)
- 年)、藤田久子(平24)、片山恵里(平25)、眼科：浅海紀子(平7)、耳鼻咽喉科：枝川久美子(平25)、麻酔科：山岸頌子(平22)、村松隆宏(平23)、救急・集中治療科：北村伸哉(平成元)、大谷俊介(平13)、大村拓(平18)、総合診療科：寺田和彦(平17)、放射線科：平田貴(昭59)、大佐和分院眼科：佐々木幸三(平6)、臨床研修医：伊藤祐輝(平26)、今本拓郎(平26)、小野里優希(平26)、加藤央準(平

### 研修医だより

#### 後期研修に臨んで

千葉大学医学部附属病院  
アレルギー・膠原病内科  
末廣健一(平22)



私は平成22年に千葉大学を卒業し、松戸市立病院で2年間初期臨床研修を行った後、同病院内科で1年間、横浜労災病院リウマチ科・膠原病内科で1年半の後期臨床研修を行い、2014年10月より千葉大学医学部附属病院アレルギー・膠原病内科でシニアレジデントとして勤務しています。大学病院の魅力はなんといつでもその症例の豊富さにあると考えています。私たちの扱う膠原病は有病率が数万から数十万人に1人と稀な疾患がほとんどです。また、単に症例数が少ない

というだけでなくその臨床症状も多彩であり、同じ疾患であったとしても1例ごととその症状は異なります。私がこれまで研修を行った病院でも多くの症例を経験することができましたが、大学病院ではさらに多くの、そして初発の症例が集まっていると感じています。大佐和分院に勤務して1年足らずですが、再発性多発軟骨炎(日本における患者数は、400〜500人と推定されています)や神経ペーチエット病の初発例など、これまで経験することのなかった疾患や病態に触れることができています。私がアレルギー・膠原病内科を選択した主な理由の1つは、全身を診ることができるといふ点にあります。膠原病自体もそれぞれ多彩

な症状を呈しますし、不明熱など診断に苦慮する症例や感染症などの合併症による入院もあります。各科の協力を得て診断、治療を行うことが重要となりますが、大学病院ではそれぞれの科が高い専門性を有しており、コンサルトを通じて自分自身の知識もブラッシュアップができていると感じています。

アレルギー・膠原病内科では卒業後5〜6年目に大学病院での病棟業務を担当します。ベッド数は15床で入局者は毎年2〜3人なので、1人あたり5〜8人程度の患者を受け持つこととなります。そこに初期研修の先生や他科からのローテートの先生が加わり診療を行っています。少人数のため年度ごとにそれぞれ特徴が出やすいのですが、受け持ち患者の決定やある程度の検査スケジュールなどは病棟担当医がおこなっており、診療における自由度は比較的高いのではないかと思います。医局の雰囲気も良く、日常診療において悩みや疑問は尽きませんが、とても相談しやすい環境にあります。また、アレルギー・膠原病内科の病棟は棟9階にあり、腎臓内科や皮膚科、形成外科との混合

病棟になっています。特に腎臓内科や皮膚科にはお世話になる場面が多く、その場で相談させていただくこともあり、恵まれた環境にあると思います。膠原病というとなんとなく難しいという印象を持たれがちですが、それ以上に大学病院での研修は得るものが多くあります。1人でも多くの先輩が膠原病に興味を持ち、千葉県の医療に貢献してくれることを期待しています。

# 学内情報

## るのほな同窓会支援

### 第10回 亥鼻キャンパス留学生交流会

生命情報科学 菅波 晃子  
細胞治療内科学 横手 幸太郎  
田村 裕

平成27年7月17日(金)、亥鼻キャンパスに集う留学生・教職員等の交流を深めるために創設され、毎年の恒例行事となりました「亥鼻キャンパス留学生交流会」International Student Festival in Inohana Campus」を開催しました。

交流会は、「るのほな同窓会館」の広々としたホールに於きまして、白澤浩教授(医学部)の開会の辞に続き、記念撮影の後、木村定雄名誉教授(本交流会の創設者・グランドフェロー)の乾杯のかけ声により、料理をはさんでの歓談が始まり

### 第10回 亥鼻キャンパス留学生交流会 参加者集計

	医学部	薬学部	看護学部	その他	計
学生(うち外国籍)	28(21)	24(16)	29(7)	2(2)	83(46)
教員(うち外国籍)	7(2)	10(3)	6(0)	1(0)	24(5)
その他	17	8	1		26
計	52(23)	42(19)	36(7)	3(2)	133(51)

出身国	医学部	薬学部	看護学部	その他	計
中国	19	9	2		30
タイ		4			4
台湾			1	2	3
バングラディッシュ	1	2			3
インドネシア			2		2
ネパール	1		1		2
ミャンマー	2				2
マレーシア		1			1
イラン		1			1
アメリカ		1			1
インド		1			1
ジンバブエ			1		1
計	23	19	7	2	51

ました。留学生の出身国は、中国・タイ・台湾・バングラディッシュ・インドネシア・ネパール・ミャンマー・マレーシア・イラン・アメリカ・インド・ジンバブエであり、お国訛りならぬ国言葉(自国語)での話に花が咲いていました。また今年度は、自国の正装で参加の留学生も多く見受けられ、Festiveらしい華やかな雰囲気となりました。歓談の間にも、織田成人教授(医学部)・Mahmood Ashfaq教授(薬学部)・岡田忍教授(看護学部)からのご挨拶や、留学生からの感謝の言葉も披露されました。

昨年度より、亥鼻地区の留学生担当教員(戸井田敏彦教授、田村裕准教授、野崎章子講師、菅波晃子助教)、学務係(医学部・加藤美由紀氏、薬学部・渡邊美雪氏、山本弦氏、看護学部・山田真規子氏)、インターナショナルサポーターデスク(渋谷圭美氏)が協力し合いながら実施し、お陰様で無事に交流会を終えることができました。これも一重に、るのほな同窓会・薬学部後援会・看護学部同窓会からの多大なるご支援とダンスサークル「舞部」(顧問・田中裕二准教授)によるご協力の賜物と思っております。

日本という異国で暮らす留学生たちにとって、年に一度の、心安らぐひと時となつたことを祈念いたします。



### 平成27年度総会において 選出された名誉会員

- 氏(昭29) 昭彦
  - 氏(昭43) 信明
  - 氏(昭49) 政裕
  - 氏(昭50) 文夫
- 米本 古山 田邊 野村

### るのほな同窓会 への寄付

- 四一七会(昭47) 八万二千円
  - 平成ゼロヨン会(平4) 一万円
- ありがとうございました。

# 課外活動団体だより

## 亥鼻空手道部

はじめに、空手道部の沿革について簡単に説明します。1958年に発足した空手同好会を前身とし、1962年に正式に空手道部として設立されました。ところが1969年に部員数の減少に伴い活動休止となつてしまいました。その後1975年に空手道部として再建され一時期部員不足に悩まされる時期もありましたが2015年6月現在、空手道部は医学部11名、薬学部3名、あわせて14名で構成されており、少しずつではありますがにぎやかさを増しています。以前は団体戦に出場する人数さえ難儀していたのですが、ここ

2、3年の間で部員が増えただけでなく西千葉空手道同好会、青葉看護専門学校空手道部や、千葉大学の留学生など様々な人たちとともに日ごろの練習に励むようになりました。

医学部2年 深澤 嘉樹

だき、月、金曜日は部員同士で精進しています。遠藤師範の指導からは空手の種々の動きに多くの工夫がなされていることや、組手

次に最近の活動について紹介いたします。空手道部は和道流空手の指導を水曜日に遠藤正行師範からいた



のような相手との駆け引きの面白さを学ぶことができました。夏には西千葉の空手道同好会とともに合同練習として藤田幸雄先生(千葉大学教育学部教授)からご指導をいただいています。リズムを使ったステップ練習や音楽をかけたつづけた動的な練習方法は普段の練習とは異なりますが体育学に裏付けされており大変勉強

になることばかりでした。東日本医科学学生総合体育大会では団体戦にフルメンバーで参加できるようになったものの、残念ながら個人団体ともにめざましい成績をあげることはできておりません。今後部員一同より一層鍛錬に励むつもりです。最後に空手道部を設立、存続させてくださったO

## 会 員 从

### 欧 州 医 学 史 巡 り — ロンドン —

ロンドンへは日本から直行便で12時間前後だが、泣く子もだまるヒースロー空港の入国審査の行列にはいつもながら閉口する。今年3月にはアムステルダムからロンドンシティーエアポートに降り立ったが、ヒースロー空港とは全く異なり何ら並ぶこともなく入国できたことには驚いた。ロンドンには英国首都だけあって、医学史施設は豊富である。以下筆者自体訪問した施設の一部を簡単に紹介する。

王立内科医協会(The Royal College of Physicians)は地下鉄Great Portland Street駅北に位置し、ヘンリー8

世の狩猟場であったRegent公園南東部にある。ウィリアム・ハーヴェイの胸像が展示された玄関ロビーを通り過ぎると1階ホール壁面には英国で活躍した内科医の面々の肖像画が架けられている。2階の回廊にはハーヴェイ関連の品々が展示されており、循環器を志す先生方には必見の施設である。なおハーヴェイはロンドンの聖バートロミュー病院で医学を学び、イタリアのパドヴァに留学している。聖バートロミュー病院にもハーヴェイも含め医学史関連の展示物を一般開放した博物館がある(写真)。

一方地下鉄Holborn駅から歩いて5分ほど南にはLincoln's Inn Fieldsに面して王立外科医協会(The Royal College of Surgeons)がある。ヘンリー8世が外科医組合と床屋協会を統合し、1540年に床屋・外科医組合が結成されたことに始まる。1階大ホール周囲には歴代の英国外科医の肖像画が掛けられているが、最も目立つ中央には外科医リスター卿の肖像画が架けられている。また外科医ジョン・ハンターの収集した膨大な解剖標本も、政府が援助して収集管理され現在のハンター博物館になっている。本人の意思を無視して作成されたチャールズ・バインの巨人症骨格標本もこの中にある。なお3階には医療関係者なら入れるウエルカム解剖病理博物館がある。London University College医学史の解剖や病理の実習や口答試験に利用されているが、日本ではアト

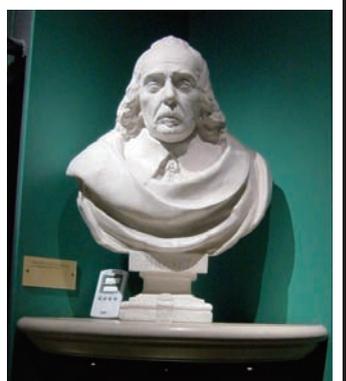
ラスでしかお目にかかれない稀少な病理標本が数多く展示されている。貴重な実物病理標本を保存展示することは、日本でも医学専門教育上重要である。同様の意味では、King's College Londonのグロウマン病理博物館への訪問もお勧めする。特にその教育病院であるガイ病院関係者であり、それぞれの病名の由来ともなっているトーマス・アジソン、トーマス・ホジキン、リチャード・ブライトンらが報告したオリジナル病理標本は一見の価値がある。その一部は拙著(日本醫事新報2013, No461, p.678)に紹介した。

紙面の関係で詳しくは紹介できないが、他にも科学博物館内ウエルカム医学博物館、旧セント・トーマス病院手術講堂、セント・マリー病院内フレミング実験室跡、ソーホー地区内ジョン・スノーのコレラ井戸跡、ケンジントン公園内ジョン・エンナー銅像など、ロンドンは医学史上見どころ満載の都市である。

杉田 克生 (昭54)

B・OGの先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。私たちが現在このような恵まれた環境で練習ができるのは皆様のおかげです。誠にありがとうございます。

空手道部役員  
主将 栗満紳太郎  
副将 右田修介  
会計 岡野公亮



聖バートロミュー病院博物館内のウィリアム・ハーヴェイ胸像

# 同窓会員著書の紹介

濟陽高穂(昭45) 著  
新世紀版  
養生訓

河出書房新社 定価一、三〇〇円(税別)

鈴木 信夫(昭47)



医学部を卒業し医師としての道歩んだ先には、一体、何があるのでしょうか。そのような疑問に対する答えとして、好例となる書のように、外科医としてスタートし、その道の経験から、栄養・食事の果たす効能に絶大な活力のあることを見出し、本書に至っているのです。「21世紀版の生活指図書として完成させたのです。」

では、本書を手にとってみてください。すると、次から次へと興味を湧いてくるではありませんか。まず考えさせることは、書名です。何故、貝原益軒著「養生訓」と同じか？健康長寿の源が、食を含む生活のスタイルにあることを見抜い



## Towards a Paradigm Shift in Cholesterol Treatment A Re-Examination of the Cholesterol Issue in Japan

Tomohito Hamazaki, Harumi Okuyama, Yoichi Ogushi and Rokuro Hamano  
出版社 S. Karger AG

浜崎 智仁(昭46)

この本(実際は雑誌の増刊号の形をとっている。Ann Nutr Metabol 2015;66 (Suppl 4): 1-116)は日本でのコレステロール治療の根本がいかほど怪しいかを、主に日本での疫学調査と2012年度版の動脈硬化学会のガイドラインを精査する形で述べたもので、Free accessとなつている。Free accessとは、著作権は出版社(Karger社)が持っているが、出版費用は出版社がすべて負担する方法で、現在はやりの著者が出版費用を負担する open access とは異なる。

欧米の出版社から学術関連の本を執筆依頼された場合、ほぼ例外なく原稿料も印税も入らない。そこで、本が出版されるときは広く世に回るように、安く売ってくださることを願うことになる。この本も2万円前後するはずだったが、先生方が気軽に中身を覗く

係はいかなる地域でも成立する。他にも、家族性高コレステロール血症(FH)が全てを解く鍵であること、そのFHが心筋梗塞を起こすのは、コレステロールのせいではなく、別の原因があること(凝固系の亢進、あるいはLDLを十分利用できないため血管が栄養不足を起こすなど)が問題であることなどを示した。実際、ヘテロのFHで心筋梗塞を起こす人と起こさない人ではコレステロール値に差はない。しかもこれは天井効果などではない。ホモタイプ(FH)では、コレステロール値がさらに高く、冠動脈疾患による死亡率もさらに高いからだ。

動脈硬化学会のガイドラインについては、粘り強く精密に調査した。ガイドラインに出てくる重要な日本の研究を詳細に調べると、論文の中に不合理な点が多数見つかった。動脈硬化学会が参考文献として挙げた文献については、是非本書を読んで頂ければと思う。重大なスタチンの問題点も記載した。スタチンは血液脳関門を通過するのである。脳は外界からコレステロールを実質上もらわない唯一の臓器で、自分自身でコレステロールを合成している。しかも他の臓器の約10倍もコレステロールがつまっている。スタチンで精神神経系の副作用が出ないわけがない。

ユニークな出版社である。今に至るまで、とうとう一度も書類による契約書を交わさなかった。著作権を譲渡するとの契約書も存在しなければ、口約束すらない。全て、紳士協定なのだ。Karger社のおかげで、大変貴重な別世界を体験させて頂いた。ただ感謝。(7月にKarger社より連絡があり、Karger社の論文中で今までの最高アクセス・ダウンロード数を記録したとのこと。さらに、最新の情報では17,000となり、桁違いのアクセス数となりました。)

\* Free access :  
<http://www.karger.com/Journal/Issue/266692>  
PDF ファイル入手先  
目次等 : <http://www.karger.com/Article/Pdf/381653>  
本文等 : <http://www.karger.com/Article/Pdf/381654>

~まさかの休業への備え~  
**東京海上日動が提供する超ビジネス保険の  
地震休業補償**  
＜連絡先＞  
**(株)パイオニア** 電話:0120-36-8442

### 大場敏明(昭48)、高杉春代 著 ともに歩む認知症医療とケア

現代書林 定価 一、三〇〇円(税別)

近藤 克則(昭58)



認知症高齢者の数は2012年の時点で全国に約462万人、今後10年間で1.5倍に増え、2025年には700万人を超えると厚生労働省は推計している。65歳以上の高齢者のうち5〜6人に1人と、認知症はまさにコモンディーズとなる。そのことに15年も前に気づいた大場敏明氏が「われわれ町医者こそが、日本の認知症問題を解決する鍵を握っている」という思いに駆られ、認知症ケアに取り組んできた先進的活動を紹介した本である。

医療だけでなく、予防から生活支援、介護などまで包含し、住み慣れた地域での生活を支える「地域包括ケアシステム」の整備が今後の課題となっている。それを15年間の実践を通じ、大場氏が理事長を務める医療法人アカシア会(三郷市)は、すでに形にしてきた。

クリニックふれあい早稲田を中核とし、9種類もの幅広い事業を展開しているのだ。訪問看護ステーションや居宅介護支援事業所、デイサービス、高齢者グループホームあたりまで展開している医療法人なら、さほど珍しくない時代になった。しかし、それらに加えて小規模多機能型居宅介護事業所、障害福祉相談支援センター、地域活動支援センター、就労移行支援事業所まで展開している。プロローグ「患者さんの「その人らしい生活と人生」を支えて」に始まり、第1章「認知症急増時代」医療の主役は「かかりつけ医」に、第2章「地域包括ケア時代」かかりつけ医が取り組む認知症医療、第3章「認知症医療の重要なパートナー、認知症ケア」、第4章「家族と地域」とともに歩むケア」が、患者さんを輝かせる」の4章からなる。その中では認知症ケアには医療だけでなく、介護サービスや家族会など多様な資源が必要であること、それとともに、かかりつけ医も要

役を担うべきであること、そして「もの忘れ外来」の開設、認知症の人が「行ってみたくなる介護事業所」の運営、患者さんの「自分史づくり」など、具体的な試みを事例も含め紹介している。地域包括ケアの対象は高齢者、或いは医療と狭く捉えられていることが多いが、若年の障害者や家族介護者まで視野に入れた本来の「地域包括ケア」を展開している先進的な取り組みである。共著者である介護統括・教育部長の高杉春代氏による認知症ケアや若年性認知症・家族の会などの活動、家族と地域と「ともに歩むケア」から学ぶことも多い。

評者は、研修医時代に大場氏の薫陶を受け、その長期的な視点と計画の実現に向けた徹底的な粘り強さに敬服した一人である。本書を手にして、評者が研究の道に転じた後の15年間に大場氏が本領を発揮して、認知症ケアの領域で展開してきた取り組みの徹底ぶりに改めて敬服した。認知症介護研究・研修東京センター長、本間昭先生も推薦している。今後、認知症に関わる多くの人の手にとって欲しい本である。

済陽高穂(昭45) 著  
早わかりDVDブック  
今あるガンが消えていく食事  
マキノ出版  
定価一、四五〇円(税別)



### 雑 文 雑 談 千葉の食べ物

石 出 猛 史 (昭52)

よそから千葉に移って来た人たちにとって、千葉の食べ物というと、落花生くらししか思い浮かばないらしい。筆者も生まれ育ちとも、東京の山の手ではあるが。千葉県は、花・苗木・畜産などを含めた農産物の産出額で、北海道・茨城に次いで全国第3位である(平成24年度)。ねぎ・大根・日本梨・ほうれん草・枝豆・蕪・さやいんげん・春菊・落花生・なばな・パセリは全国一である。2位に挙げられるのが、薩摩芋・人参・西瓜・とうもろこし・びわ・苗木・洋蘭(切花)がある。他にも全国的に主要な生産品となっている品目には、マッシュルーム・白瓜・花のストック・金魚草・ひまわり・ペゴニア・きんせんか・水仙・アイリスなどが

ある。近年、県の農業総合研究センターで開発された「おまさり」という大粒の落花生がある。さほどうまくはない。千葉県でも静岡県でポピュラーなようにある。静岡県民のなかに、静岡で改良された品種と想っている人がいた。蕪は東庄町(香取郡)のものが良質で知られている。土質が良くないと良いものが育たないということである。千葉県と薩摩芋の関係は由緒がある。享保年間(1716〜1735)、日本橋の魚問屋の仲青木昆陽の建言に従い、飢饉対策として、町奉行所与力の給地である幕張村で試作に成功した。京成幕張駅の近くには昆陽神社があり、道路をはさんで向かいに「甘藷試作の地」の碑がある。昆陽は蘭学の

ここで酪農を開始した。日本酪農発祥の地である。現在のは県の乳牛試験場が置かれ、乳牛の改良と酪農の普及にあたっている。今も白牛を飼育している。養豚は、香取・海匠・山武地方に集中している。県では純粋種のヨークシャー種を、ダイヤモンドポークという名称で売り出している。近年野生の鳥獣を食材としたジビエ料理が話題になるが、江戸時代の日本でも肉食はされていた。「江戸繁盛記」によると、猪・鹿・狐・兎・かわうそ・狼・熊・かもしかななどである。大喜の道の駅で猪丼を提供していた。値段も高くなく結構美味である。東京の両国橋近くにある、江戸時代から続くという猪料理屋のぼたん鍋よりも食べ易かった。土気ホキ美術館の近くにあるイタリア料理店では猪のステーキを出している。産地を聞いたら大喜喜ということであった。千葉県は農業大国である。



### 篤志の力を支える公益化

公益財団法人 猪之鼻奨学会

会長 鈴木 信 夫 (昭47)

猪之鼻奨学会は平成24年4月1日、公益財団となりました。千葉大学の教官などにより運営される公益財団としては、唯一のものです。では、この公益化ということとは、どのような意味を持つのでしょうか。

まず、表をご覧ください。実は表中の様々な書類を毎年6月末までに、監督官庁である千葉県へ提出する必要があるあります。特に、会計面では厳密な会計上の法規に基づき帳簿を必須とするため、千葉県と高橋会計事務所による指導を仰いでおります。

その上で、平成27年度事業も順調に展開していると

ころです。5月1日付猪之鼻奨学会会報第19号を12500部発行し、ののほな同窓会報第169号とともに皆様のお手元へも配送しました。さらに、奨学金の貸与を6月に1名、また7月に5名の研究者へ助成金を支払いました。

このような事業や本財団の運営に諸税が課せられることを避けられるのが、公益財団化の意義でもあります。もちろん、そのための諸手続きが必要です。役員、定款の変更など法務局への

届け出が必要となります。一方、四角枠で囲んだお知らせのように寄附金の所得控除が叶えられることもなっております。日本における多くの団体が公益化を放棄した中で、本財団が公益財団として生き残ることとした所以は、ここにあるといっても過言ではないかもしれません。どうかこの控除方式をご活用ください。

【表】 千葉県定期提出書類：事業報告申請書類一覧

法人の基本情報及び組織について	貸借対照表及びその附属明細書
組織（財団用）	損益計算書及びその附属明細書
役員等名簿	事業報告及びその附属明細書
役員等名簿（閲覧用）	監査報告（及び会計監査報告）
事業の一覧	収支相償の計算（50%を繰り入れる場合）
財産目録	当該事業年度末日における公益目的取得財産残額
公益目的事業について	当該事業年度中の公益目的増減差額の明細
事業報告等に係る提出書	滞納処分に係る国税及び地方税の納税証明書
運営組織及び事業活動の状況の概要等について	控除対象財産
公益目的事業比率の算定総括表	遊休財産額の保有制限の判定
公益目的事業比率算定に係る計算書	情報開示の適正性
公益目的保有財産配賦計算書	監督上の処分等の一覧
理事、監事及び評議員に対する報酬等の支給の基準を記載した書類	他の団体の意思決定に関与することができる財産保有の有無
各事業に関連する費用額の配賦計算表（役員報酬・給料手当）	

#### ご寄付のお願いと寄付金の所得控除のお知らせ

猪之鼻奨学会は、医学及び薬学の研究を奨励することを目的として、研究業績の優秀な者に研究費の補助、そして学資の欠乏を告げた学生に学資の貸与を行ないます。これらの事業を遂行するために、どうか皆さまのご支援・ご協力を宜しくお願い申し上げます。

一口5,000円ですが、ご都合により何口でも結構です。

なお、その年に支出した特定寄附金の合計額より2千円差し引いた額が年間所得から控除されます。（控除できる特定寄附金は、その年の総所得金額等の40パーセント相当額が限度額になります。）

今後とも、皆様方の一層のご指導ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

ご寄附にご賛同いただける方は下記口座にお振込みください。

千葉銀行 本店営業部  
 口座番号 397281  
 口座名 公益財団法人猪之鼻奨学会 会長 鈴木信夫

または、事務局にご連絡いただければ、振込手数料が無料のゆうちょ銀行の払込票を送付させていただきます。

公益財団法人猪之鼻奨学会 理事・評議員一同

### 平成27年度第1回常任理事会議事要旨抜粋

日時：平成27年4月15日  
 （水）18時より  
 場所：東京ステーション  
 コンファレンス  
 出席者：伊藤晴夫（会長）  
 大井利夫（副会長）  
 濱野高穂（副会長）  
 鈴木信夫（副会長）  
 田中 光（会計監事）  
 税所宏光（参与）  
 青木 謹 伊藤達雄  
 岡本和久 小野田昌一  
 加部恒雄 黒木春郎  
 宍倉正胤 白澤 浩  
 鈴木 守 田邊政裕  
 角田隆文 幡野雅彦  
 花輪孝雄 林田和也  
 吉川広和 吉原俊雄  
 崎尾秀彰 中田義隆  
 忍頂寺紀彰 清水俊行  
 中村真人 高橋宏和  
 （敬称略）

回のののほな同窓会報は4月16日に編集委員会が開催され、平成27年5月12日発行予定であることが報告された。

#### 2. 協議事項

##### (1) 名譽会員の推薦について

白澤浩理事より、資料に基づき説明された。名譽会員推薦に関する内規に則り支部より2名、大学より2名の推薦者を候補として総会に諮ることが承認された。

##### (2) 役員選出について

白澤理事より役員交代について資料に基づき①会長・濱野高穂、②副会長・吉川広和、鈴木信夫、吉原俊雄、③会計監事・田中光、秋葉哲生、④参与・大井利夫、税所宏光、を候補者として総会に推薦する旨提案され、承認された。大濱博利参与の後任については千葉県のはな会から選出する事とし、新会長、副会長に一任した。理事については、①茨城・中田義隆（昭36）、②静岡・忍頂寺紀彰（昭42）、鈴木昭一（昭43）、③栃木・崎尾秀彰（昭44）、④信州・栗田純夫（昭59）、⑤大学・三木隆司（昭63）を候補者として理事会（総

会と併催）に推薦する旨提案され、承認された。また、総務会のメンバーについての説明があり総務会委員の名前を会務分担表に明記することとし、事業部の将来検討委員会の責任者は黒木春郎理事に依頼した。

##### (3) 平成26年度決算

##### 1) 決算報告

幡野雅彦理事より資料に基づき以下の通り説明があった。収入については、①一般寄附金として47年卒クラス会417会より82,000円の寄附があった。②会報の広告掲載収入がNPO法人医師研修支援ネットワークより1年間の広告掲載依頼があり予算を超えた。③雑入は3年に1度発行するののほな同窓会名簿への広告掲載料があった。支出については、①人件費はフルタイムの雇用を見送ったため余剰。②雄翔寮への図書寄贈は学生からの希望がなかったために今年度は見送った。③IT広報関連事業費には一般寄附個人よりの寄附82,000円を支出の一部に充当。④建設資金については外構工事等の支払い等が説明され、平成26年度の決算報告が了承された。

会議に先立ち、新理事候補の先生等からご挨拶をいただいた。伊藤晴夫会長の挨拶の後、同会長が座長となり議事が進められた。

#### 1. 議題

##### (1) 広報編集関係

鈴木信夫副会長より、次

2) 会計監査  
田中光監事より監査の結果、会計処理が適正である旨、資料のとおり報告された。

**(4)平成27年度事業計画**

白澤理事より資料に基づき事業計画が説明された。田邊政裕理事より、のほな同窓会館二期工事の資金計画について説明があり、今後も継続して検討することとした。白澤理事より第59回東医体資金援助について同窓会からの支援、またOBにも寄附依頼をすることが説明され、了承された。

**(5)平成27年度予算**

幡野理事より資料に基づき、平成27年度の予算について以下の通り説明があり承認された。

収入については、①寄附金の項目、会報関連の広告掲載分は予算額を減額。②基金より外構工事等の支払いのため1千万円を取崩す。支出については、①会報・会誌印刷費、郵送費を増額。②白衣式はDVD制作代負担のため増額。③雄翔寮支援に代わり、国際交流支援を新たに予算に計上。④留学生交流支援費は他学部からの支援もあるため減額。⑤IT・広報関連事業費は数年にわたり予算を超えているため増額。⑥建設資金

は外構工事等未執行分として1千万円を計上。⑦東医体の準備金として120万円を計上。

**(6)のほな同窓会賞選考結果**

田邊理事より、資料に基づき功労賞、社会貢献賞の候補者についての説明があった。推挙された候補者について選考委員会にて検討した結果、功労賞に北川定謙氏(昭31)、社会貢献賞に松永正訓氏(昭62)が候補者として推薦された旨の報告があり、承認された。

**(7)総会議題等について**

済陽高穂副会長より、資料に基づき、平成27年度ののほな同窓会総会は、東京年6月13日に銀座アスターお茶の水資館にて開催することが報告された。総会後に千葉大学医学部附属病院長から病院の現況報告、のほな同窓会特別賞の表彰等を行う予定であることについて説明され承認された。

**(8)将来検討委員会**

将来検討委員会委員高橋宏和氏より資料に基づき説明があった。メールマガジンの送付、HP作成、バナ

1などの事業計画を更に具体的にしていくことが提案された。拡大した委員会の正式名称を検討すること、その委員会の活動費や権限についても検討することとした。

**平成27年度のほな同窓会総会議事要旨**

日時：平成27年6月13日  
(土) 16時より  
場所：銀座アスターお茶の水資館  
出席者：59名  
委任状：568名

伊藤晴夫会長の辞、白澤浩理事の司会により開会となり、まず物故者に黙祷を捧げた。伊藤会長の挨拶の後、同会長が議長に選出され議事が進められた。

**議事**

(1)名誉会員の推薦について  
白澤理事より、内規に基づき推挙された4名について説明があり、承認された。(23面に掲載)  
(2)年次活動について(報告事項)  
1)庶務部報告  
鈴木信夫副会長より、平

込書について説明があった。本年度の入学生、卒業生より入会申込書の提出を依頼し、のほな同窓会員としての自覚を促すようにした。のほな同窓会名簿にも学生会員を掲載するように進めていくこと等の説明があった。

**平成26年度決算について**

成26年度の各会議開催や各支部との交流等について報告された。

2)事業部報告  
同副会長より、同窓会賞の授与、同窓会報の発行、同窓サポートプロジェクト等について報告された。

**3)平成26年度決算について**

1)決算報告  
幡野雅彦理事より、決算内容について以下のとおり説明があった。収入については、会費収入、事業収入はほぼ予算どおりであるが、会報広告収入が増額となり、雑収入では3年に1度発行の名簿の広告掲載による収入があった。支出についてはほぼ予定通り執行されているが、会報印刷費、郵送料が頁数の増加により予算を超えていること、大学学

からの要望がなかったため本年度は図書寄贈を行っていないこと、IT広報関連事業費は動画の掲載が多かったために予算を超えていること等の報告があり、平成26年度の決算報告が承認された。

**2)監査報告**

田中光監事より、監査報告があり決算案が承認された。

(4)平成27年度事業計画について  
①鈴木副会長より、会報発行、各地区ののほな会への支援、各地区ののほな会と本部間との交流、研究教育助成、IT広報関連事業、同窓会員の組織の充実等について説明があった。

**②のほな同窓会館二期工事について**

田邊政裕理事より、二期工事について田邊政裕理事より説明があり、二期工事案、資金計画案について今後も検討していくことが述べられた。

承認された。

**(5)平成27年度予算案について**

幡野理事より、各予算項目について以下のとおり説明があった。収入については、ほぼ前年と同じであるが、会報関連の広告収入を減額、同窓会基金より同窓会館の外構工事費等として1,000万円の移管を計上した。支出については、

会報会誌印刷費・郵送費を増額、白衣式のDVD制作代を増額すること、雄翔寮支援を本年度は行わず、新たに国際交流支援費を設け学生が海外へ留学する際に支援することとした。留学生交流会については他学部からの支援もあり今年度から減額すること、IT広報関連事業費は数年予算を超えているため増額すること、積立金として東医体の準備金を計上すること等が説明され、平成27年度予算が承認された。

**(6)役員の選出について**

白澤理事より、現役員の任期(2年)満了に伴う新役員の選出について会則等の説明があった。

夫氏・吉原俊雄氏、参与・大濱博利氏・大井利夫氏・税所宏光氏、会計監事・田中光氏・秋葉哲生氏の役員が承認された。

**②理事**

会則第12条に則り、中田義隆氏、忍頂寺紀彰氏、鈴木昭一氏、崎尾秀彰氏、栗田純夫氏、三木隆司氏の理事選出が承認された。

③常任理事  
会則第8条に則り、総会を理事会併催とすうえで、中田義隆氏、忍頂寺紀彰氏、崎尾秀彰氏、栗田純夫氏、三木隆司氏の常任理事選出が承認された。

**④評議員**

会則15条に則り、評議員が承認された。

**(7)その他**

・亥鼻祭実行委員の学生より亥鼻祭について説明があり、亥鼻祭への支援依頼があった。  
・済陽高穂氏より新会長として挨拶いただいた。  
伊藤会長の辞により、閉会となった。

**報告**

千葉大学大学院医学研究 院・医学部附属病院の現況  
千葉大学大学院医学研究 院長 中山俊憲氏、千葉大 学医学部附属病院長 山本 修一氏より千葉大学大学院

医学研究院・医学部附属病院の現況についてご報告いただいた。

ののほな同窓会賞表彰式  
田邊理事の司会により、功労賞（北川定謙氏）社会貢献賞（松永正訓氏）の表彰式が行われた。伊藤会長より表彰盾と副賞が授与された。

ののほな同窓会受賞者挨拶  
功労賞受賞者 北川定謙氏、社会貢献賞受賞者 松永正訓氏が挨拶された。

ののほな同窓会特別表彰  
済陽副会長より、故黒山宏志氏への長年にわたる支援を顕彰し、藤塚光慶氏、黒田重史氏、住吉徹是氏に感謝状と記念品が授与された。

記念講演

伊藤会長の司会により、稲葉憲之氏（獨協医科大学長）が「B型肝炎ウイルス母子感染対策の推移と更なる工夫」と題して講演された。

懇親会

済陽副会長の司会により開会された。伊藤会長の挨拶に続き、田中光氏の乾杯ご発声、叙勲者、名誉会員、

地区ののほな会会長等からご挨拶を頂いた。歓談の時間を過ごし、閉会となった。

平成27年度予算

平成26年度決算報告

収入の部	款項目	予算額(円)
	会費等	20,000,000
	事業収入(註1)	5,500,000
	他会計より受入	20,000
	寄付金	500,000
	基金より取崩し(註2)	10,000,000
	雑収入	20,000
	(当期収入計)	36,040,000
	前年度繰越金受入	7,265,512
	収入合計	43,305,512

収入の部	款項目	予算額(円)	決算額(円)	対予算額(円)
	会費等	20,000,000	19,973,000	-27,000
	事業収入(註1)	5,500,000	5,754,434	254,434
	他会計より受入	20,000	9,723	-10,277
	寄付金	900,000	1,102,000	202,000
	基金より取崩し(註2)	30,000,000	13,363,261	-16,636,739
	雑収入	20,000	1,434,192	1,414,192
	前年度繰越金受入	3,153,823	3,153,823	
	収入合計	59,593,823	44,790,433	-14,803,390

支出の部	款項目	予算額(円)
	総務費(註3)	12,800,000
	事業費(註4)	24,020,000
	法人税等	1,400,000
	予備費	3,785,512
	積立金	100,000
	東医体準備金(註5)	1,200,000
	次期繰越金	
	支出合計	43,305,512

支出の部	款項目	予算額(円)	決算額(円)	対予算額(円)
	総務費(註3)	12,800,000	9,615,244	-3,184,756
	事業費(註4)	43,620,000	26,515,577	-17,104,423
	法人税等	1,400,000	1,294,100	-105,900
	予備費	1,673,823	0	-1,673,823
	積立金	100,000	100,000	0
	次期繰越金		7,265,512	7,265,512
	支出合計	59,593,823	44,790,433	-14,803,390

註1～4：収入、支出の主要細目等

	款		27年度予算	26年度予算	
収入の部	(註1) 事業収入	会員総合補償制度集金事務費	5,500,000	5,500,000	
	(註2) 同窓会基金より取り崩し	基金より同窓会館建設費に充当	10,000,000	30,000,000	
支出の部	(註3) 総務費	会議費	3,200,000	3,200,000	
		人件費	7,000,000	7,000,000	
		その他	2,600,000	2,600,000	
	(註4) 事業費	会報・会誌	5,200,000	5,000,000	
		学事奨励	・ののほな賞	550,000	550,000
			・ののほな美術展	200,000	200,000
		各種助成	・猪之鼻奨学会	400,000	400,000
			・附属図書館	800,000	800,000
			・白衣式	600,000	500,000
			・雄翔寮図書		100,000
			・国際交流支援	100,000	
			・留学生	100,000	200,000
			・白菊会	200,000	200,000
			・支部	3,400,000	3,400,000
			・同窓サポートプロジェクト	600,000	600,000
	・IT関連事業費	1,200,000	1,000,000		
	同窓会館建設費	10,000,000	30,000,000		
	その他	670,000	670,000		
(註5) 積立金	東医体準備金	1,200,000			

いのほな通信メーリングリスト 登録のご案内

平成20年度以降の医学部卒業生 平成23年4月以降に附属病院にて初期研修を開始された方へ

千葉大学医学部附属病院総合医療教育研修センターでは、千葉大学大学院医学研究院・医学部附属病院からの情報を確実に皆さんにお知らせするために、いのほな通信メーリングリストを構築・運用しています。

いのほな通信メーリングリストでは、各診療科からの医局説明会、後期研修医の募集、各種勉強会、セミナーの案内が掲載される等、積極的な利用がされています。登録可能な方々は、平成20年度以降の医学部卒業生、平成23年4月以降に附属病院にて初期研修を開始された方々となっております。新たに登録を希望される方や登録アドレスの変更の場合は、氏名、現職、卒業・初期研修開始年度とともに、メールアドレス（携帯電話のメールアドレス可）を下記連絡先までご通知ください。なお、お送りいただいた情報は個人情報となりますので、千葉大学医学部附属病院総合医療教育研修センター教育・研修データ管理部門（IR部門）で管理し、上記の目的以外には使用いたしません。また、各科の先生方で新たに配信を希望される場合は、別途その旨IR部門までお問い合わせください。

連絡先

千葉大学医学部附属病院総合医療教育研修センター教育・研修データ管理部門（IR部門）

電話：043-226-2699 内線6199

E-mail：leonvelasco@chiba-u.jp（担当：ベラスコ・レオン）

# オンライン会報案内

http://www.inohana.jp/online/index.html



インターネット上の情報版、オンライン会報もご覧ください。ヤフーやグーグルなどからは、以下の総合目次をトップ項目として閲覧可能です。

## オンライン会報 総合目次

Windowsで動画をご覧になる場合はInternet Explorerを推奨します。  
Macintoshで動画をご覧になる場合はプラグインソフト「Flip4Mac」をインストールしてください。  
>>ダウンロード >>インストール方法  
ただし「\*Mac/スマホ対応\*」があるものは、プラグイン無しでご覧になれます。

- ・病院紹介
- ・求人・求職
- ・同窓会員経営の病院・医院・診療所の紹介
- ・生涯学習講座
- ・インタビュー
- ・国際交流
- ・都道府県医師対策
- ・オンライン書庫
- ・話題
- ・同窓会
- ・クラス会・他大学等
- ・キャンパス便り
- ・「ほっとひといき」ちば通信（千葉日報）
- ・協賛企業からのお知らせ

求人・求職欄では、会員所属病院あるいは会員経営の病院における医師の募集を広告しております。

### ■ 求人・求職



**地域と知に未来を紡ぐ**  
 独立行政法人地域医療機能推進機構  
 船橋中央病院  
 院長 高橋 誠  
 医師募集内容 (PDF55KB)  
 ▶ WEBサイト  
 [2015.02.10掲載]

### ■ 病院紹介欄での掲載動画も併せてご覧ください



医師の将来は、最初の10年間できまる  
 高橋 誠 (社会保険船橋中央病院・病院長)  
 [2009.5.27掲載]



**地域包括医療（ケア）を継承し、更に発展させる役割を担って**  
 国保匝瑳市民病院  
 (写真左より)  
 事業管理者・病院長 菊地紀夫  
 事務局長 山内保則  
 内科科長 海野広道  
 独立行政法人国立病院機構千葉医療センター  
 研修医 八木久子  
 医師募集内容 (PDF13KB)  
 ▶ WEBサイト  
 [2013.8.7掲載]

### ■ 同窓会欄での掲載動画も併せてご覧ください



みのはな同窓会報『みのはな』学生編集長時代の思い出  
 菊地紀夫 (昭和49年卒)  
 [2013.8.19掲載]



**医療・介護を通じて「あんしん」と「まごころ」を届けます**  
 東京さくら病院  
 管理者・院長 東海林 豊  
 事務長 氏 建人  
 ・東京さくら病院 ▶ WEBサイト  
 医師募集内容 (PDF60KB)  
 ・東京さくらメディカルケアセンター  
 ▶ WEBサイト  
 医師募集内容 (PDF66KB)  
 [2014.10.16掲載]

**お知らせ**  
 同窓会員が千葉県内で経営する病院・医院・診療所については、オンライン会報および千葉日報との両メディアでの連動による紹介が可能です。  
 詳細につきましては、同窓会事務局までお問合せ下さい。  
 Tel : 043-202-3750

オンライン会報では会員が経営する医院・診療所の紹介もしております。

■同窓会員経営の病院・医院・診療所の紹介



**NEW**  
循環器内科を活気づける薬学力  
ひらのメディカルクリニック  
院長 平野智久  
[2015.6.17掲載]  
\* Mac/ スマホ対応\*



思春期医療の発展をめざして  
船橋ベイサイド小児科  
院長 佐藤武幸  
[2015.5.20掲載]  
\* Mac/ スマホ対応\*

オンライン会報で掲載された千葉県内の医院・診療所については、千葉日報紙でも紹介されます。



本千葉小児科の診療室



本千葉小児科外観

2010年、JR本千葉駅から徒歩1分の地に開院。電子カルテ(タイナミクス)を導入するとともにホームページの充実を図り、実際の治療や検査の様子などを豊富な写真とともに詳細にわたって紹介。患者は来院前にインターネット上で具体的な症状や治療を把握することができる。

X線撮影はデジタル・ラジオグラフィを導入。診察室隣でX線撮影を行うと15秒後には診察室の画面に画像が直送され、直ちに診断説明ができる。

小児科はアレルギー、せき・鼻水・下痢などを主症状とする感染症、成長、神経発達など全身を診る診療科で、他の専門分野の協力が必要な場合はすぐに専門医に連携紹介している。

また小児科内分科では低身長・成長の早過ぎなどの成長障害、肥満、甲状腺腫、糖尿病などを扱う。

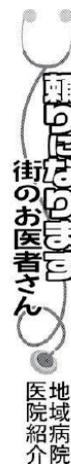
診療の傍ら、院長は近い将来、休暇を利用して医療ボランティアとして海外でも活躍したいという夢を持っている。また東日本大震災で避難生活を送る子どもを育てる母親への支援を、医院をあげて続けている。患者さんからも多くの支援物資提供を受けたという。

◆安田敏行院長プロフィール  
1977年、千葉大学医学部卒。千葉大学病院、千葉医療センターなどで小児の2次・3次救急に長年携わり、5年前に本千葉小児科を開業。

◆診療案内▽診療科 小児科 内分科代謝科▽受付時間 9~12時・15~18時▽休日 木・土曜午後、日曜、祝日▽住所 千葉市中央区港町17の2▽電話 043(441)7852

本千葉小児科

小児科、内分泌代謝科として地域密着



千葉日報 平成27年6月19日号より転載——安田敏行先生(昭52)

頼りになります 街のお医者さん (千葉日報紙掲載)

	名称	院長等	タイトル	掲載年月日
1	神経内科津田沼	服部孝道所長(昭42)	身近な疾患、時間かけ問診	2012.9.10
2	さくさべ坂通り診療所	大岩孝司院長(昭47)	がんのホームドクター	2012.10.13
3	社会保険船橋中央病院	高橋誠院長(昭46)	4C軸に地域医療支える	2012.11.23
4	うたせメディカルクリニック	渡辺滋院長(昭47)	循環器疾患はおまかせ	2013.2.26
5	船橋市立医療センター	高原善治院長(昭49)	高度急性期医療に特化	2013.3.14
6	あきば伝統医学クリニック	秋葉哲生院長(昭50)	漢方治療の専門医院	2013.6.7
7	(医社)三友会三枝病院	三枝一雄理事長(昭32)	人間愛を基盤に診療	2013.6.17
8	済生会習志野病院	山森秀夫院長(昭47)	高度専門医療と救急医療	2013.6.21
9	(医社)豊心会中野内科クリニック	中野義澄院長(昭45)	神経難病患者を在宅診療	2013.7.6
10	(医社)嗣業の会外房こどもクリニック	黒木春郎院長(昭59)	発達途上の悩みも対応・支援	2013.8.20
11	(医社)蘭綏会佐野医院	佐野千寿子院長(昭50)	病児保育で働く母親を支援	2013.9.7
12	(医社)以仁会稲毛サティクリニック	河内文雄院長(昭50)	医療現場に、たゆまぬ改革を	2013.10.10
13	(医社)緑星会どうたれ内科診療所	堂垂伸治院長(昭60)	患者にやさしい街づくりを	2013.10.31
14	桜並木診療医院	浅野誠院長(昭48)	臨床医療40年の経験と知識を生かす	2015.2.12

\*本企画は、原則ゐのほな同窓会HP オンライン会報に公開後、千葉日報に掲載される記事です。

お く や み

薬丸比呂志(昭16) 西沢英三郎(昭17) 松永千秋(昭18) 野際英雄(昭19) 山上美枝子(東冥医専・昭19) 横地尚(昭20) 鈴木静夫(専20) 宮本みち(帝医医専・昭20) 工藤興一(昭23) 漆原弘(専23) 塙賢二(専23)

増田茂(専23) 秋山精治(昭24) 石井富夫(専24) 渡辺良彦(昭25) 佐藤智則(専25) 早船喬一(慈恵大・昭25) 水嶋節雄(信州大・昭25) 藤江良雄(専26) 片山利夫(昭27) 大原一夫(昭29) 大日方洋(日本医大・昭30) 西川義明(昭34) 岩瀬秀一(昭35)

三橋麗子(横浜市大・昭35) 土屋惠一(信州大・昭36) 金武禧之(昭38) 富岡容子(昭39) 吉崎正則(東京医大・昭40) 岡崎卓見(昭42) 立原蓉子(昭43) 力武知之(昭47) 永野耕士(昭48) 霞弘之(兵庫医大・昭61) 土屋友彦(日本医大・昭61) 呉青洋(昭62)

千葉医学雑誌91巻3号 2015年6月

症例
有茎空腸を用いて再々建した食道癌術後挙上結腸壊死の1例
天海博之 河野世章 阿久津泰典 上里昌也 星野 敢 松原久裕
乳腺基質産生痛にびまん性浸潤像を示す管状癌を伴った1例
松崎弘志 清水辰一郎 唐司則之 吉原ちさと 佐塚哲太郎
金田陽子 小林拓史 横山将也 大塚亮太 柳原章寿
吉岡隆文 山本悠司 佐藤やよい 宮崎彰成
夏目俊之 田中 元 丸山高嗣 宮澤幸正

直腸原発リンパ上皮腫様癌の1切除例
佐塚哲太郎 菅本祐司 福長 徹 田崎健太郎 太田拓実
竹下修由 浦濱竜馬 會田直弘 浅井 陽 石岡茂樹
江口正信 木村正幸 松原久裕
上行結腸への直接浸潤を伴う原発性虫垂癌の1例
豊住武司 大平 学 宮内英聰 上里昌也 藤城 健
石井清香 浦濱竜馬 水藤 広 星野 敢 松原久裕

話 題
ドイツ・ベルリンにおける千葉大学グローバル化拠点形成に向けて
森 千里 柏原 誠 戸高恵美子 鈴木 都 中岡宏子

学 会
第1232回千葉医学会例会・千葉大学大学院医学研究院
先端応用外科学平成23年度例会
第1302回千葉医学会例会・第14回呼吸器内科学会(第28回呼吸器内科同門会)
第1303回千葉医学会例会・第32回神経内科学会例会

OAP要旨
脊椎カリエス後高度後弯変形に対しpedicle subtraction osteotomyによる
矯正手術治療を行った1例
鈴木雅博 折田純久 西能 健 稲毛一秀 久保田剛 志賀康浩
山内かづ代 江口 和 青木保親 中村順一 井上 玄 宮城正行
佐久間洋浩 及川泰宏 中田幸夫 豊根知明 高橋和久 大鳥精司
金田篤志

編集後記
CHIBA MEDICAL JOURNAL Open Access Paper
Case Report
Successful surgical correction of post-tubercular kyphosis by pedicle subtraction osteotomy: a case report
Masahiro Suzuki, Sumihisa Orita, Takeshi Sainoh, Kazuhide Inage, Go Kubota
Yasuhiro Shiga, Kazuyo Yamauchi, Yawara Eguchi, Yasuchika Aoki
Junichi Nakamura, Gen Inoue, Masayuki Miyagi, Yoshihiro Sakuma
Yasuhiro Oikawa, Yukio Nakata, Tomoaki Toyone
Kazuhisa Takahashi and Seiji Ohtori
第91回千葉医学会学術大会

千葉医学雑誌91巻4号 2015年8月

最終講義
近未来医療
—医療情報学が医生物学を造る・超高齢社会時代の医療パラダイムシフト— 高林克日己
精子と卵子の出会いのために
—基礎研究から不妊症診断と治療への挑戦— 年森清隆
心筋イオンチャネルと不整脈の研究 中谷晴昭
私の歩んだ道—新しき検査診断学を求めて 野村文夫

原 著
千葉県における認知行動療法の実態：質問紙調査
原口 正 清水栄司 中里道子 小堀 修 伊豫雅臣
学 会
第1292回千葉医学会例会・第4回臨床研修報告会
第1299回千葉医学会例会・総合安全衛生管理機構
研究発表プログラム(第3回桜美会)

雑 報
がん治療における実地診療と臨床試験の間
関根郁夫 飯笹俊彦 鍋谷圭宏 永瀬浩喜 山口武人
OAP要旨
ステロイド性大腿骨頭壊死症のMRIに関するシステムティックレビュー
—30年の進歩—
中村順一 大鳥精司 折田純久 宮本周一 輪湖 靖 三浦道明 高橋和久
小林欣夫

編集後記
CHIBA MEDICAL JOURNAL Open Access Paper
Review Article
Systematic review of magnetic resonance imaging in corticosteroid-associated osteonecrosis of the femoral head : 30 years of advances
Junichi Nakamura, Seiji Ohtori, Sumihisa Orita, Shuichi Miyamoto
Yasushi Wako, Michiaki Miura and Kazuhisa Takahashi

編 集 後 記

今夏は猛暑日が続き、うだるような暑さの毎日でした。とはいえ80.00坪におよぶ多摩キャンパスでは、昨年竣工したのとはな同窓会館、改修が終了したのとはな記念講堂、本年7月にオープンした外来診療棟をはじめとする附属病院のビル群に、さらに趣ある医学部本館や多くの建物が深い緑の中に建ち並び、落ち着いた美しい景観を呈しております。

お手元にのとはな同窓会報第170号をお届けいたしました。4期8年間実した内容となりました。た伊藤晴夫先生(昭39)が退任され、済陽高穂先生(昭45)に同窓会長が引

き継がれました。伊藤先生には本同窓会報の内容充実にお力を注がれ、全面的カラー化、オンライン会報の充実を実現されました。済陽先生には本会報を引き続きどうぞよろしくお願いいたします。大学学長や教授への就任のご挨拶をみますと、同窓会会員がさまざまなか所で大変ご活躍されているのが実感されます。受章のご挨拶では、旭日大綾章の唐澤祥人先生、旭日双光章の青木謹先生、嶺井進先生、瑞宝小綬章の鳥羽剛先生、竹森利忠先生よりご寄稿を戴きました。皆様のご業績の証であり、心よりお慶び申し上げます。とくに青木先生にはのとはな同窓会報の編集委員の一人として日頃ご指導

高橋和久(昭51)